

歴史小説の試み

関 谷 一 彦

はじめに

論文集に歴史小説を載せることに、違和感をもつ方もおられると思うので、その理由を簡単に述べてみることにする。その理由は、歴史学と文学の接近にある。しかも実りある接近が、最近見られる。しかし、よくよく考えてみると、歴史学と文学にはもともと境界線はなく、一つのものであった。フランス語の《Histoire》という語には、「歴史」と「物語」の両方の意味があり、両者の区別が明確になったのは十九世紀に入ってからである。小倉孝誠の『歴史をどう語るか』には、《Histoire》を歴史学が成立した十九世紀以降に焦点を当てて、どのように語るかが問われている。⁽¹⁾ここではこの書を参考にしながら、歴史学と文学の接近について見てみよう。

歴史小説の成立は、周知のとおり十九世紀前半にイギリス人ウォルター・スコットの諸作品により創始され、当時大成功を収めたためにユゴーやバルザックなどのフランス人作家たちにも多大の影響を与えた。⁽²⁾歴史学の成立もミシュレ以降に帰せられるが、ミシュレの歴史叙述は歴史上の人物が対話をする、まさに物語としての歴史であった。その後科学としての歴史学を主張する実証主義歴史学、それに続くアナル学派、歴史的真実を批判する「言語論的

転回」を支持する立場、またコルバンなどの感性の歴史学など新たな理論を伴って批判的に塗り替えられてきた。では、文学の側から歴史についてどのように語られてきたのだろうか。例えばフロベールは次のように述べて、歴史小説の作者に歴史を歪曲しないように二つの責務を求めている。

第一に、一定の時代と社会について可能な限り正確で、網羅的な知識を獲得すること、そして第二に、歴史学が沈黙に付すことを想像力によって再構成することである⁽³⁾。

こうした主張は、現在から見ると何ら新鮮味はないが、フロベールは「歴史学があえて述べないことを文学は表象することができるだろう⁽⁴⁾」とも述べて、文学の可能性について言及している。

また、『ヤン・カルスキ』を書いたヤニック・エネルは文学と歴史学の境界をあらためて審問に付して次のように述べている。

わたしが探求しているのは、ドキュメンタリーとフィクション、歴史と詩、表象可能なものと表象不可能なものとの緊張関係のうち⁽⁵⁾に正当性を有するような文学です。わたしが思うに、そのような稜線上で、境界そのものを問いかけながら未来の文学は展開することになるでしょう⁽⁶⁾。

エネルも歴史学と文学の境界線上に新たな可能性を見出している。しかしながら、両者の接近のなかにもいささか重大な意識の相違も見られる。その相違とは「真実」への欲望と言うべきものだ。この点については本書以外ですで述べたが⁽⁶⁾、再確認しておこう。それは、これまでの歴史学がいかに「真実」への欲望に囚われていたかという問題

である。「真実」への欲望は、唯一絶対の真実を希求する科学としての実証主義歴史学だけではなく、歴史学の「真実」を否定する「言語論的転回」を支持する歴史学でも同じである。なぜならば、否定しなければならぬ「真実」に、その意識はすっかり囚われているからだ。歴史学者が「真実」の問題にいかにも囚われているか、歴史学の「暫定的真実」を主張する現在の歴史学のリーダーであるリン・ハントを見てみよう。彼女は、自分の立場を次のように規定している。

私たちの書物 [Joyce Appleby, Lynn Hunt and Margaret Jacob, *Telling the Truth about History*, New York: W. W. Norton, 1994.] は、歴史の絶対的真理が存在するという考え方と歴史におけるあらゆる真理を否認する考えとの中間的立場をとっている。要するに、暫定的な真理の立場をとっているのだ。⁽⁷⁾

また、自らの手法について次のように説明している。

ときおり、科学技術に依拠することはあっても、歴史学は科学ではない。有効な場合には科学的手法を用いる文学的な技芸である。しかし、その根本的な目的は、本当の物語を語ることにある。本当のことを表現した部分は、証拠資料に依拠している。この点での歴史家は、探偵、法律家、捜査ジャーナリストに似たところがある。情報をかいくぐり、文字史料や口承史料などの史料を分析して比較する。あらゆる可能な手続きを利用して、件^{くだ}の事実、つまり真実に到達するのだ。⁽⁸⁾

さらに、歴史学の「本当の物語」とは「真実」、つまり「歴史的事実」を史料の分析を通して、また解釈によって明らかにすることであるが、この「解釈」は多様であり、解釈の数だけ物語があるので、「真実」も多様である。彼

女は、「歴史家は常に個人史や社会的文脈によって規定される観点から歴史を記述しているので、その叙述が完全に客観的だと主張することはできない⁹⁾」とも述べていて、「真実」が変更される可能性も示唆している。したがって、歴史家が見出す「真実」は「暫定的真実」でしかないことになる。また、歴史学の叙述の問題は文学との関係のなかでは最も重要な点でもある。というのも、叙述の問題は、史料にもとづいた暫定的真実をどのように表現するかというエクリチュールの問題であり、個人の表現の問題であるからだ。したがって歴史叙述の物語性的問題は、歴史学者にとっては重要な問題であり、このことが文学への接近を促している。

小倉は第六章の「十九世紀における歴史叙述の思想と詩学」のなかで哲学者レーモン・アロンを取り上げて、「彼〔アロン〕は、歴史家もまたみずからが生きる時代の価値体系に影響され、過去の理解には歴史家の現在が介入してくることは避けがたいと認めていた¹⁰⁾」と述べている。また、「歴史叙述はけっして過去の再現ではなく、みずからの時代と社会の状況に組み込まれた人間の手になる意識的な構築であり、過去の解読は現在の理解なしにはありえない¹¹⁾」というアロンの言葉は、現在にまで生きている重要な指摘であるだろう。こうした十九世紀の意識は、二〇世紀を挟み、二十一世紀になって文学と歴史学の関係に新たな地平を生み出そうとしている。

では、このような歴史学の文学への接近に対して、文学の側からの歴史学への意識的な接近はあるのだろうか？ その点はやや曖昧だ。「歴史小説」と言っても、物語を作る際の史料の用い方に厳格な定義があるわけではなく、史実よりも物語の面白さを優先させることも可能であるからだ。作者がどのように描くかは、作者の自由裁量に委ねられていて、作者自身が「真実」の探求に意識的ではない。「意識的ではない」というよりもむしろ、作者が求めるその「真実」は「歴史的眞実」ではなく、物語のなかでの「眞実」あるいは作者が信じる「眞実」と言った方がいいかもしれない。要するに「眞実の認識」が違うのである。

さて、本論ではマルキ・ド・サドが一七七二年に起こした「マルセイユ事件」を取り上げる。この事件を、あえて



現在のオーバーニュ通り (写真：関谷)



「マルセイユ事件」現場の建物、事件は4階で起こった (写真：関谷)

「歴史小説」として提示することで、事件の詳細を描き出してみたいのである。史料にもとづきながらも、その空隙は想像力が埋めることになる。想像力を生かすためにも、最大限史料を読み込むことに努めた。事件の骨格は当時の警察資料に基づいているし、「マルセイユ事件」の前には大嵐が来ていたことなどは当時の新聞を利用している⁽¹²⁾。しかしながら、歴史的史料を踏まえつつ本論でやろうとした試みは、「真実」の追求ではなく、現在から理解した、しかも個人のエクリチュールが含まれる事件の解釈である。それは文学の側からの歴史学へのアプローチの一つの試みである。サドの人生のなかで重要な「マルセイユ事件」であるが、事件の解説はあえて省略するので、参考文献に目を通していただければと思う。

マルセイユ事件

1

一七七二年六月二十四日、マルセイユでは前日の嵐が嘘のように太陽が肌をじりじりと焦がしていた。前夜は雷鳴が轟き、怒りをぶちまけたような雨が石畳を叩きつけたが、今は地中海の紺碧の見慣れた空が戻っている。くすんだ灰色の建物の玄関では、いつものように人々が入り口に腰を下ろし、お互いに大声で話し合い、通りを行く人を眺めていた。嵐のときにはすっかり鳴りを潜めていた猫たちも、我が物顔で通りを闊歩していた。海から吹き込む西風に乘って、昼食時には鰯を焼く臭いが街の中心部には届いていた。雷雨の激しさが人々の口の端に上り、港の舟にも被害が出たと話し合っていた。ナポリの漁船が、嵐を掻い潜って港に逃げ込んだという噂が流れ、ナポリではこの嵐のせいで未曾有の被害が出たとまことしやかに囁かれていた。

嵐の話題が一段落すると、今度は数日前に起きたひとりの若者が一家全員を殺害した話になった。誰かがその若者は頭がおかしかったと言えば、他の男はそうではなく父親と揉めていたことが原因だと言い、また他の者はその若者はプロテスタントだと言った。ある年寄りには、最近の若者は何をしでかすかわからない、腹を立てると平気で人を殺す恐ろしい世の中になったもんだと言えば、神を怖れない若者が増えているのがその原因だと誰かが言い、みんなも納得して頷いている。猫が玄関先でミヤウ、ミヤウと鳴くと、ひとりの老人が抱き上げて、頭を優しく撫で始めた。その白猫は気持ちよさそうに体を預けていたが、向かいの建物の老人が鰯の頭を見せつけると、飛び跳ねて鰯に向かっていった。猫は思い通りにならないなどそれを見ていた別の年寄りが独り言ちた。

ここオーバーニュー通りは、マルセイユ港の南東にあつて、貧しい人々が住む界限である。海が荒れていなければ、昼間は男たちが漁に出るため、残された年寄りたちが玄関先で何もせず一日を過ごす。お互いに顔見知りであるために、遠慮のないおしゃべりが延々と続く。まるで喋ることが生きている証で、まもなく訪れる死を喋ることで忘れようとしているかのようだ。しかしそんなお喋りも、自分が喋るにはいいが、聴く側になるといつの間にかその場からいなくなる。建物のなかに消えてしまふのだ。そしてまた、現れては玄関に腰を下ろし、話し始める。氣候が良くなった六月は雨でない限り、毎日同じ光景が繰り広げられる。

侯爵サドと従僕ラトゥールがマルセイユに馬車で到着したのは、嵐が通り過ぎた日の夕方であつた。ラ・コストの城を出るときには雨混じりの激しい南風が吹いていたが、マルセイユに着くと、西風が心地よく、港に日が沈むにはまだ数時間あつた。侯爵は馭者に「十三番区館」という宿に投宿するので、そこで降ろすように伝えていた。激しい風のせいで、予定の時刻よりも遅れたが、宿には夕食前に着くことができた。侯爵は、マルセイユに着く前に、ラトゥールにさまざまな指示を与えていた。今回の旅の一番大きな目的は、為替手形を現金に換えることだが、それが上手くいけばお前にも思う存分遊ばせてやるから儂わづの言う通りにしろとラトゥールは言われていた。

2

ラトゥールがラ・コストの城にやつてきて、すでに二年が経とうとしていた。侯爵サドの叔父であるサド神父に声を掛けられてラ・コストにやつてきたが、生まれもつた柔軟な人当たりと熾火のように周囲を和ませる飄軽な性格が侯爵のお気に召し、今は彼にとつてなくてはならない従僕になっている。とりわけ城主が命じることには、「畏かしこまりました」と答えるのが口癖で、絶対服従の態度を示すので、最近ではラ・コストで催される芝居にも端役で登場する

こともある。ラトゥールにとつても、城での生活は別世界にいるようで、これまでの野良仕事に戻りたいとは決して思わない。サド以外の主に仕えたことがないので比較のしようもないが、主とはサドのように自分のやりたいことは何でもでき、欲しいものは何でも手に入れることができるものだと思つてゐる。ラトゥールは主よりも背が高く、顔には痘痕があるが、端正な顔つきであることも主に気に入られた理由だ。サドはよく「ラトゥールよ、お前は背が高く、いい顔をしてゐるので、どこに連れて行つても見栄えがする」と話した。ここ最近では、侯爵の趣味に付き合われることも多く、城内の芝居の後興奮冷めやらぬ侯爵に命じられるまま尻の穴を貸し、また侯爵の尻の穴をラトゥールの一物で射貫くこともしばしばある。城に来るまで、こうした行為は神の掟に背き、地獄行きだと教えられていたが、侯爵は「何も畏れることはない、自然に反する行為などこの世には何ひとつないのだ」とラトゥールには聞いたこともない人物たちの名を挙げながら、その正当性を彼に吹き込んだ。ラトゥールのこれまで聞かされていたさまざまな価値が、この二年間ですっかり覆つてしまつた。「俺はあまりにも世間知らずで、本当のことを知らなかつたんだ」と近頃は思つてゐる。ラ・コストに来るまで、生まれて一度も邑を出たこともなく、サド神父に週に一度簡単な読み書きは教えてもらつたものの、毎日は同じことの繰り返して過ぎていつた。邑の者は農作業に明け暮れ、楽しみは季節ごとのカトリックの祭りだけだ。変化のない単純で、目の前の仕事に追われる生活、それがマザンでの暮らしだつた。しかし、そんな暮らしもマザンにずっといたなら、当たり前過ぎて何の疑問も抱かなかつたことだろう。習慣とは恐ろしいものだ、とラトゥールは思つた。ラ・コストに来て、自分が変わったのがわかる。着る服も変わったが、やはり一番変わったのは自分をひとりの人間として見るようになったことだと思ふ。これまでは自分の周りに必ず誰かがいた。農作業と用を足すときはひとりでだが、近くには必ず人がいた。しかも、それは知己を得る人だつた。邑に行商人がやつて来ることもあるが、多くは顔見知りであり、知らない者が闖入するとそのことが瞬間に邑中に知れ渡り、誰もが警戒意識を共有した。邑ではひとりになることがないから、自分について、自分とい

う人間について考えることがなかったし、考える必要もなかったと、自分の過去をラトウールは振り返った。貧しい暮らしの中で、意識に上るのは食べることに束の間の祭りだけだった。

ラ・コストの暮らしで一番驚かされたのは、食べることを心配しなくていいことだ。どこから食べ物が湧いてくるのか知らないが、貯蔵庫にはいつも潤沢に小麦があり、季節の野菜、塩漬けにした肉が保管されており、ワインの樽も無くなることはなかった。たえず補給されるので、ラトウールには湧いてくるように見えるのである。食料を手に入れるためには金が必要なことはラトウールも知っている。しかし、その金がいったいどこから入るのかさっぱりわからなかった。時々侯爵が侯爵夫人と金のことで話し合っているのを耳にするが、侯爵は最後には腹を立て、「僕の言う通りにするのだ」と大声を出すのがお決まりだった。そんなとき侯爵夫人は、不満の溜息を漏らす、それ以上侯爵に挑むこともなかった。諦めたように身を引くのが常だった。侯爵夫人は美人ではないが、優しさが顔に滲んでいる。ラトウールがいつも注目しているのは夫人の美しく長い指だった。それに対して、最近ラ・コストにやってきた侯爵夫人の妹は美しかった。侯爵夫人よりも小柄だが、淡いブルーの瞳をもつ目は大きく、鼻は小さく纏まっていた、薄い唇の口元には小さな黒子ほくろがあった。肌は太陽に焼かれたことがないかのように透き通っていた。ラトウールは近くで見ているだけであるが、優しさのなかに蠟燭の芯のような赤く燃える輝きを見て取った。これほど光り輝く人を見たのはこれまで生きてきて初めてだと彼は思った。しかし、これも自分があまりにも小さな世界のなかで生きてきたからであって、知らない世界でもっと美しい人もいるのではないかと思う。ラ・コストの城から見下ろせるポニユーの邑から城内に女中としてやってきた若い女たちに、ラトウールはちやほやされたが、女たちに手を出すことは侯爵によって厳しく禁じられていた。とはいえ、侯爵に見初められて腹が大きくなった女中をポニユーの邑まで送り届けたことがあるので、女中に手を出すことは侯爵だけの特権であると思っていた。

その侯爵は気難しい人だった。自分の気に入らないことがあれば、下男であろうが、下女であろうが、相手の言い

分を聞くこともなく城から追い出した。ラトウールが「畏まりました」と常に答えるのは、侯爵の性をよく心得ているからである。侯爵に仕えるとは、言われたことを忠実に実行することであって、それ以外の選択肢は思いも及ばない。マザンで食べるために農作業を続けてきた過去と、この城での豊潤で心地よい毎日を較べれば、侯爵の命を受け入れることなど何でもない容易いことである。受け入れることが当然であるだけでなく、侯爵に喜んでもらえることが、ラトウールの喜びでもあった。

侯爵の近くにいて驚かされるのは、どんなことでも知っている知識の量だ。侯爵の口からは、知識が滑らかに澁みなく出てくる。いったいあの頭のどこに蓄えられているのだろうか。書棚には一生かかっても読めそうもない数の本が並んでいる。本というものを讀んだことのないラトウールには、本の量だけ、知識の塊になって、侯爵の頭に詰め込まれているように思われた。「ラトウールよ、お前は这个世界に神がいると思うか？」と尋ねられたとき、「はい、もちろん神はおられます」と答えると、「では、それを証明してみよ」と言われた。「私のような知識のない者が、神様の存在を証明することなどできるはずがありません」と言う、「お前は疑うことを知らぬ。なぜ教えられたことを疑おうとしないのだ。お前にはわからないかもしれないが、この世界に神はおらぬ。神は人間が創り出した空想の産物だ」と断言された。

「人間というものが、自然の抗い難い計画に、その存在を負っているにすぎないことは、十分に証明されている。また人間は、地球の存在によって必然的に生じた産物でしかなく、その存在を誰にも負っていないことも、十分に証明されている。そしてこの神なる存在も、愚かな連中によって創造者であるとか、われわれが目になっているあらゆるものの唯一の製作者と見なされているが、人間理性の限界を越えるものにすぎず、この理性がもはやなにも見えなくなった瞬間に、理性の働きを助けるために創り出された幻想にすぎない、ということも証明されているのだ。さらにまた、神が存在するなどということは不可能であり、愚か者たちがなんの根拠もなく神のせいになっているものも、つ

ねに活動し、運動している自然が自ら手に入れたものであることも、これまた十分に証明されているのだ。万が一、この無力な神が存在するにしても、当然のことながらそれはあらゆる存在のなかでもっとも滑稽な存在であることは確実だ。なぜだかわかるか、ラトゥール？」

「わかりませぬ……」

「よく聞け！ なぜなら神は、仕事をしたのはたった一日で、それ以来何百万世紀の間、まったく軽蔑すべき無活動の状態にあるからだ。もしも神が宗教によって描かれているように存在するものであるとするなら、当然のことながら存在するもののなかで一番軽蔑すべきものであることも確実だ。というのも、神はその全能の力によって悪を阻止しうるにもかかわらず、この世に悪がはびこるのを許してきたからだ。要するに、これらすべては証明されることであり、異論の余地なく確実なことである。重要なのは疑うことだ。疑うことから真実は生まれるのだ！」

「畏まりました……」

侯爵の話の詳細はラトゥールにはわからなかったが、疑うことが重要だということだけはわかった。しかし、何を疑えばいいのだろうか。人を疑うことはあつても、言葉を疑うことなどこれまででなかったし、ましてや畏れ多い神の存在を疑うことなどこれまで生きてきて一度もなかった。「畏まりました」とラトゥールは返事をしたが、その返事は習慣が答えさせたものだった。

またある時は、「運動は物質にとつて本質的である」という「哲学的命題」についてお前の考えを聞かせろと言われた。「運動」が何を意味するのか、「物質」とは何なのか、「本質的である」とはどういうことなのか、ラトゥールは教えを乞うたが侯爵は自分の頭で考えよと言われた。考えようとはしてみたものの、侯爵が口にする「哲学」というものが何であるのか、それがどんな価値をもつのか、習慣によって生きているラトゥールにはまったく考えが及ばなかった。ときどき呪文のように「運動は物質にとつて本質的である」という言葉を唱えるが、その意味するところ

は今なお謎の中にある。

ラトゥールは侯爵に呼ばれば、彼のもとに馳せ参じたが、そうでなければ下男や下女たちとともにさまざまな用役に携わった。力仕事はラトゥールの得意とするところで、あちらこちらから声がかかったが、冗談を交わしながら周囲を楽しませ、自分も楽しんだ。下男、下女たちは仕事の役割がはっきりと決められているが、ラトゥールの役割は曖昧で、侯爵のお呼びがかからないときは城内の雑役に携わるように命じられていた。六月に入ってから、侯爵は芝居のときを除くとラトゥールを呼び出すこともなく、自分の部屋に閉じこもり、何かに没頭していることが多かった。下女たちの話では、書斎の隣にある小さな部屋で、侯爵は薬の調合に夢中になっているとのことだった。そんな矢先、ラトゥールは呼び出され、マルセイユにお供するように命じられたのだった。

3

六月二十五日昼過ぎに、ラトゥールはサン・フェレオール・ヴィユー通りにあるジャンヌ・ニクーのもとを訪れた。ジャンヌとはすでに昨夜会っている。まだ若い娼婦だったので、侯爵のお気に入りだったが、彼女からはつきりと嫌気が感じられた。ジャンヌは部屋にいたが、扉を開けようともせず、ラトゥールは扉越しに話しかけた。

「今からどうだい、宿に來ないかい、ジャンヌ？ 侯爵がお前と遊びたいって言っておられるぜ」

「今日は止めとくわ……」

「どうしてだい、金は弾むから」

「あのお偉いさんにはこりこりだわ……」

「そんなこと言わずにさあ、来てくれよ、悪いようにはしないから。俺もいるから一緒に楽しもうぜ」

「彼の趣味がわたし嫌いな。自分の言いたい放題、やりたい放題なんだから……」

「侯爵はお前のことがお気に入りなんだ！」

「わたしは嫌いと言ってるでしょ！ しつこいわよ！」

しだいに大きな声になるジャンヌとこれ以上話しても無駄だと悟ったラトゥールは、「じゃあ、また来るからな」と言い残して、彼女の部屋を後にした。ラトゥールには、彼女の気持ちが変わらなくもない。というのも、昨夜の侯爵の言動にジャンヌはすっかり驚いた様子だったからだ。行為の最中に、神を罵る言葉を吐き、通常の客とはまったく違う方法で射精しようとする侯爵に、異様な、恐ろしい雰囲気を感じ取ったとしても決して不思議ではない。ラトゥールも同様の異常さを当初は感じたからだ。ジャンヌも金払いのいい侯爵に最初は命じられるがままその肢体を委ねていた。しかし行為の途中から、何度もしつこく肛門性交を求める侯爵に嫌気が差しているのが、彼女の表情からはつきりと読み取れた。ジャンヌには、彼は芝居好きで、こうした遊びも芝居を演じるためのものであって、その兆候は興奮してくるとますます自制できなくなると帰り際に伝えたが、彼女はうんざりした様子だった。

マルセイユの街は今日も晴れ渡っている。日陰を歩くと海から届く爽やかな風がラトゥールの顔に当たり、通り過ぎていく。風の中には、塩の香りとともに青魚の生臭いにおいも混じっている。ラトゥールの気持ちは少々焦っていた。今日中に若い娼婦を四、五人集める手筈を整えねばならないからだ。港に近い裏通りで、立ちん坊のまだあどけない顔をした若い女を見つけ、声を掛けた。

「どうだい、遊ばないかい？」

「あんたとっ。」

「いや、俺の主人が女の娘たちと遊ぶためにマルセイユに来てお前のようなとびつきり若い娘たちを探してくるように言われているんだ。たっぷり礼をするから、来ないか？」

「行つてもいいけど、いくらくれるの?」

「五リールはもらえる」

娘は腕組をしてちよつと考える仕草をしたが、表情を変えず「いいわ」と言った。

「だが今夜はこの俳優たちと食事をする事になつてゐる。明日の夜十一時あしたはどうだい、お前の名前は?」

「マリアンヌよ」

「それじゃあ、マリアンヌ、明日俺が迎えに来るよ。俺はどこに来ればいい?」

「オーバーニユ通りのニコラ楼に来ればいいわ」

「わかつた、じゃあ明日な」

ラトゥールは一安心をしたが、深い溜息を残してオーバーニユ通りを歩いた。この辺りには娼館がいくつもあり、立ちん坊で客を待っている娼婦も多い。しかし、侯爵が求めるのは「若い娘」であり、歳が行つた女に用はない。そこが難しいところだ。余りにも化粧の濃い、肌がふやけた、嗚れ声の女は避けなければならない。ラトゥールは侯爵の好みを熟知している。侯爵夫人の妹が理想だが、そんな娼婦に出くわすことは当然のことながら無理があつた。なぜ「若い娘」でなければならぬか、侯爵はラトゥールに昨日の夕食の後、詳しく説明した。それによると、侯爵は偉大な実験をするとのことである。

「ラトゥールよ、この実験は人類の歴史に寄与する重要な試みだ。俺が排泄物に関心があることはお前もよく知っているだろう。ラ・コストの実験室で排泄を促進する薬を作つたのだ。排泄と言っても屁のことだ。それにはアニスはアオハンミョウという甲虫を乾燥させて作る媚薬だ。リシユリユー元帥がいつもこれを使つていたためにリシユリユー式ボンボンと言われている。俺はアニスとカンタリスの二つを調合して屁を出させる媚薬を作つたのだ。俺が

作った薬によって出る屁の匂いを嗅いでみたい。アニスが含まれているから、嘸かしアニスのいい香りを含んだ屁が出るものと思われる。その匂いを思う存分嗅ぎながら、女の尻を犯してみたいのだ」

「それにはどうして『若い娘』が必要なのですか？」

「若い娘の肛門から出る屁の方が、アニスのいい匂いがするからだ。また、尻の穴が柔らかくて挿入しやすい。このことはお前にもよくわかるだろう！」

ラトゥールには、なぜ「若い娘」の屁の方がアニスのいい香りがするのかわからなかったが、尻の穴が柔らかいのは「若い娘」の方であることは理解できた。昨夜、ジャンヌの肛門を射貫くように命じられたラトゥールは、これまで経験した侯爵の肛門とはまったく違う、柔らかく、美しい牡丹色の肛門を体験していたからだ。

ラトゥールの験に、ジャンヌの肛門が突然浮かんた。すると今度は、ジャンヌがカピュサン通りに彼女の知り合いの娼婦がいると話したことを思い出した。名前は思い出せないが、確か若くて、ジャンヌとは気が合うと言っていた。ラトゥールは踵を返した。壁に凭れながら右脚をくの字に曲げた金髪の女が、「ムスユー」と声を掛けてきた。ほつてりと太った女が、腕組をしていた腕を解いて手招きをしている。暗紅色あんこうのドレスからは丸々とした腕がはみ出していた。

「急いでいるから駄目なんだ」

ラトゥールは右手で意思表示しながら女の前を足早に通り過ぎた。オーバーニュ通りからカピュサン通りに入ろうとしたところで別の女に、「ムスユー」と声を掛けられたが、ラトゥールは女の顔も見ず、右手で「ノン、ノン」と言う仕草をした。それを見ていた赤銅色の顔に深い皺を刻んでいる老人が、「若者よ、お姉さんには親切にしろよ！」と怒鳴るように言った。扉の前で日向ぼっこをしていたもう一人の老人がくすくす笑った。ラトゥールは自分があちこちから見られていることを悟り、その場から早く立ち去りたい居心地の悪さを感じた。知らない街で、侯爵が

求める「若い娘」を見つけるのはなかなか大変だと思えてきた。

4

その夜、侯爵はマルセイユの俳優たちと夜遅くまで芝居の話で盛り上がっていた。ラ・コストやマザンの城で上演された数々の芝居について、また自分の戯曲である『浮世の結婚』について、ワインを片手に上機嫌で話していた。ラトゥールには、芝居の話の何が面白いのかよくわからなかったが、食堂の片隅に腰を下ろして、いつ果てるともわからない侯爵の独演会に付き合った。みな笑い声のなかで、俳優のひとりが口を押さえながらも欠伸をした。それを目にした侯爵は、突然「じゃあ、今夜はこれくらいにしよう。なかなか愉快な夜だった」と言いながら、一座の年長者と思われる白い顎髭を生やした男と握手をするとあつという間に彼らを追い出してしまった。

「ラトゥールよ、若い娘は見つかったのか？ 儂も手を尽くしたが、いい娘を調達するのはなかなか難しいぞ。マルセイユの女は欲が深くていけない。すぐに金、金と言ってきやがる」

「ひとりだけ調達しました。マリアンヌというおぼこ娘ですが、約束させました。明日の晩十一時に迎えに行くと言っております」

「そうか、儂は明日手形を現金に換える用を済ませてから、その女のところへ行くことにする。お前はそれまでに若い娼婦を集めておけ！」

「畏まりました」

侯爵は俳優たちに喋り過ぎて疲れたのか、あるいはワインのせいなのか、重い足取りでステッキを付きながら階段を上っていた。

翌日、昼前に、ラトゥールはマリアンヌなら彼女と同じくらいの年齢の娼婦を知っているのではないかと考え、ニコラ樓を訪ねた。前日と変わらず、太陽が真上からラトゥールの髪をじりじりと焼いた。おまけにこの日は風もなく、日陰にも生暖かい空気が澱んでいた。オーバーニユ通りに入ると、娼婦たちも影を潜めて、年寄りだけが部屋の窓から通りを眺めていた。ラトゥールは視線を意識しながらも、速足でニコラ樓を目指した。前日マリアンヌが立っていたすぐ傍にニコラ樓はあった。

「ボンジュール、マリアンヌはいるかい？」

「彼女はいないよ、なんの用？」

廊下の奥から返事が聞こえ、若い女が裾の長い朱色のワンピースを着て出てきた。ラトゥールはマリアンヌと今夜約束をしていることを告げ、「よかつたら今夜一緒に遊ばないかい？」と誘ってみた。

「俺の主人が若い娘を集めて遊びたいと言ってるんだ。あんたのような若くて、可愛い子を探してるんだけどどうだい？」

彼女はラトゥールを品定めするように、頭の前から足元まで見下ろした。埃に汚れた靴を見ながら、「どんな主人？」と尋ねた。

「名前は言えないけれど、身分の高い方だ……」

「ふうん……、考えておくれ」

「金はたっぷり支払われるから、いい返事を待ってるぜ！」

ラトゥールは娼婦たちが金に弱いことをよく知っている。それは自分も同じで、金が一番信じられると感じているからだ。侯爵に忠実なもの、彼に気に入られていることもあるが、やはり金をもらえることが大きい。侯爵にとつては何でもない小銭かもしれないが、ラトゥールにとってはありがたい施しで、ドウニエ銅貨をポケットに入れて銅貨

が擦れ合う音を耳にするのが好きだった。

「今夜、マリアンヌと約束してるから、あんたも一緒にな！」

「考えとくわ……」そう言つて、口元に微かな笑みを作つた。

ラトゥールは直感的に「こいつは間違ひなく来るな」と思った。

その夜、まだ陽が残る頃に、ラトゥールは侯爵とともに、ジャンヌの部屋に向かった。ジャンヌが乗り気でないことはわかつていたが、どうも侯爵はお気に入りの方で、彼女を口説き落とすつもりだ。

「侯爵殿、あつしは表で待っていますから、どうかおひとりで行ってください」

ラトゥールはサンフェレオルルヴィユー通りに入ると侯爵に気が進まない旨を伝えた。

「あの女はあつしのことかどうも嫌いなような気がするのです」

昨日彼女の部屋を訪ねたときの「あのお偉いさんにはこりごりだわ」という言葉を思い出したが、侯爵に伝えることもできず、いささか後ろめたい気持ちを抱きながらもラトゥールは自分の気持ちを伝えた。

「あつしは表で若い娘を探しておきます……」

「わかつた、好きにすればよい」

侯爵はジャンヌの部屋がある建物の前でそう言うと、オレンジ色の夕陽が上層階を僅かに照らし出している建物の中に消えていった。通りには夕闇が迫り、所々で娼婦が立っている。市街から少し離れたこの地域は、昼間歩いたオーバーニユ通り同様に、住民と娼婦が混在して生きている。日暮れとともに娼婦の数は増えていく。ラトゥールは通りを歩きながら何人かに声を掛けたが、「今すぐ上がっていきな」という返事ばかりで、色よい返事はもらえなかつた。ジャンヌの建物の入り口に戻り、侯爵を待った。しばらくすると侯爵は現われたが、機嫌は良くなかつた。

「ジャンヌは僕の言うことを聞かない女だ。カトリーヌという若い女も部屋にいたが、ジャンヌに気を遣つて一緒

に来ることを嫌がったのだ。ジャンヌには良くしてやったのにな。」

ラトゥールは「やはりそうか」と思ったが、「遊び相手はこの街にはいくらでもいますよ」とだけ言った。

「アニスのボンボンを食べさせてやる、そのボンボンを食べると屁がしたくなるから、お前たちのアニス香の屁を口に含んでみたいのだと言ったら、ジャンヌは断りやがったのだ」

侯爵は思い通りにならないことがあるとすぐに腹を立てる。ラトゥールは侯爵のそんな気質を今はよく心得ているので、「あつしが明日よく言っておきます」と侯爵の気持ちを取りなした。

その足で、侯爵とラトゥールはニコラ楼へ向かった。すでに約束の時間だった。すっかり陽が落ちてはいるが、夜の十一時はこの界限では宵のうちで、両側の建物には点々と灯りがともっている。ラトゥールは侯爵をニコラ楼へと案内すると、「ボンソワール、マリアンヌはいるかい？」と侯爵の後ろから大きな声を出した。ラトゥールの声を覚えていた先程の女が奥から出てきて、「ボンソワール、メスユウ」と侯爵の顔をちらっと見ながら、ラトゥールに言った。「マリアンヌは海に出かけてまだ帰ってないよ。昼頃一度戻ってきたけど、舟遊びをするんだと言ってまた出て行ったよ」

「十一時に俺と約束していたんだけどな……」

ラトゥールが不満をぶつけると、「今日はいいい天気だから、気が変わったのよ！」と彼女はマリアンヌを庇った。

「侯爵殿、どうします?」

「仕方がない、ところでお前の名はなんと言う?」

「マリアネットです、ムスユウ」

マリアネットは侯爵に興味を示していることが、その言葉遣いからはつきりと読み取れた。

「お前は明日の土曜日は暇か?」

「時間はあります」

「僕は明日若い娘と遊びたいのだ。お前は気立ても良さそうだからぜひ来ないか？ 面白い遊びができるぞ！」

「喜んで、ムスユー」

「ところでお前と同じくらいの年頃の女の子を知らないか？ 四、五人で遊びたいのだ！」

「ここで働いているロゼットは私と同じ年です」

「それではぜひその娘もつれて来てもらいたい。十分な礼はすることにしよう」

「ありがとうございます。ムスユー」

「マリアンヌはいつ頃帰るんだい？」

ラトゥールが口を挟んだ。

「わからないけど、朝までには戻っていると思うわ」

侯爵は「よし、わかった」と言って、引き上げようという合図を目でラトゥールに送った。

「じゃあ明日の朝、俺が迎えに来るから。マリアンヌにもそのことを伝えておいてくれ」

ラトゥールは威厳をちらつかせながら念を押した。

「ロゼットにもだぞ」

5

翌朝八時頃、朝飯もそこそこにラトゥールはニコラ楼に足を運んだ。明日はラ・コストに戻らなければならない。侯爵からは「遊べるのは今日一日しかないから、抜かりなく手筈を整えろ」と言われている。幸いにもマリアンヌは

戻っていて、「昨夜は御免ね」と暢気そうに子供の笑顔を作った。ラトゥールは怒りをぐつと呑み込みながら、「マリアネットから今日のことを聞いたかい？」と尋ねた。

「聞いたわ。マリアネットとロゼットも一緒なんでしょ？」

「その通りだ。今から打ち合わせをするから二人を呼んでくれないか？」

ラトゥールが簡素な肘掛椅子に腰を下ろして待っていると、マリアンヌの後に続いて、マリアネットとロゼットが現れた。二人とも寝ているところを起こされた様子で、裸体の上に透けて見えるワンピースを纏っていた。

「ボンジュール、娘さんたち。マリアネットから俺の主人のことは聞いているだろ？」

「ウイ」

三人は声を揃えて答えた。

「俺の主人が今日は若い娘たちと思いい切り遊びたいと言っている。ただ、主あまじの考えではここはあまりにも目立ち過ぎてよくない。それで、場所を替えることにした」

「どこに？」

ロゼットが欠伸をした口元を押さえながら尋ねた。三人のうちでもっとも背が高く、大きな胸がワンピースから透けている。

「オーバーニユとカピユサン通りとの角にある建物だ。その四階にマリエット・ボレリという女の部屋があるから、そこに来てもらいたい」

「マリーの部屋ね？」

「なんだ、知っているのか？」

「当り前よ、この辺の住民はみんな顔見知りだから」

ロゼットがそう言うと、「客以外はね」とマリアンヌが付け加えて微笑んだ。

「それじゃあ、マリーの家に十時に来てくれ。マリアンヌ、忘れるなよ！」

「わかつてるわ」

「約束だぞ！」

二人のやり取りを聞いていたリアネットは、肩をすほめて優しく笑った。小柄な彼女は三人のなかでもっとも美しく、清楚な顔立ちをしている。ワンピースの下からは陰毛が淡く見えていた。

「侯爵は時間にくるさいからその時間には待っていてくれ」

ラトゥールはそう言い残すと、ニコラ楼を後にしてジャンヌの部屋に向かった。朝日に背中を押されるように、サン・フェレオル・ル・ヴィユー通りを西へ進むと、どこからかパンを焼くいい匂いがしてきた。その香りがマザンの子供時代を突然憶い出させた。日曜日の朝、母は決まってパンを焼いてくれた。パンが焼けるのを待ちながら包み込まれる、香ばしい、体中を幸せにするその匂いは、ラトゥールが一番好きな匂いだ。肉が焼ける匂いよりも、スープの匂いよりも、この体中に沁みわたる仄かに焦げた幸福な匂い、ラトゥールはちょっと立ち止まって深呼吸をした。妹たちはどうしているだろうか、母の焼くパンを今も頬張りながらお喋りをしているだろうか、さまざまに思いが子供時代の映像とともに鎖のように次々と現れては消えていった。

ジャンヌは部屋にいた。侯爵の使いで来たと告げると、ドアを開けて部屋に入れてくれた。その部屋は、鎧窓が半分開かれ、朝陽が射し込んでいた。

「侯爵が今から若い娘たちと遊ぶから、ジャンヌを呼んで来い」とご指名だぞ」

「その話なら昨日聞いたわ。はつきりと断ったのに」

ジャンヌは素顔でも美しいけれど、その顔には気の強さがはつきりと表れている。とりわけ彼女の黒い瞳は、相手

を睨みつけて離さない強い力をもっている。

「アニスのボンボンを食べさせてやるというけれど、それはアニスの匂いをしたガスを口に含むためと言うじゃない、そんな変な趣味の人は真つ平だわ。前にも話したでしょう、ラトゥール」

ジャンヌは「屁」と言わずに「ガス」という言葉を使った。

「どうしても嫌かい？」

「お断り！」

これ以上ジャンヌと話しても埒が明かないことを俄かに理解したラトゥールは、「侯爵がよろしく言ってたぜ」と彼女の目を見ながら優しく言った。ジャンヌはほんの少し目尻を下げたように思えたが、それはラトゥールの錯覚だったかもしれない。

「オールヴォワ、ジャンヌ」

「オーヴォワ」

6

十時を少し回った頃に、ラトゥールは侯爵とともにマリーの部屋を訪れた。その部屋はオーバーニュ通りとカピュサン通りの角にあり、三角形の形をした建物の四階にあった。侯爵は左手で手摺を握り、右手でステッキを突きながら階段を上った。ステッキの音が規則的にコツコツ鳴り、侯爵の息遣いもしだいに荒くなった。細身の体軀をしたラトゥールはその後ろからひよいひよいと付き従った。

侯爵が部屋の扉を叩くと、マリエット・ボレリがすぐに扉を開けた。

「ボンジュール、ムスユー」

「ボンジュール、マリエツト」

ラトゥールは侯爵がどのようにしてマリーと知り合ったのか知らないが、すでに顔馴染みであることはわかった。マリーは二人を他の三人の女たちが待つ部屋に案内した。そこはマリーの仕事部屋で、壁に沿ってベッドが置かれ、その横に椅子があるだけの簡素な部屋で、窓には天鵞絨の黒いカーテンが掛かっていた。侯爵と初めて顔を合わせる三人は、侯爵が部屋に入るなりその表情を緩めた。灰色の燕尾服を身に纏い、その下には金盞花の色をしたヴェストと半ズボン、羽根飾りのついた帽子をかぶり、長剣を腰に吊り、金の握りがあるステッキを持つ侯爵の容姿が、彼女たちを魅了したように思われた。燕尾服の青い裏地は、いかにも洒落た貴族を体現し、ふつくらとした端麗な顔立ちに娼婦たちはうっとりと思入った。

侯爵は四人の娘を眺め回すと、いきなり遊ぶ順番を決めようと言い出した。

「儂の手の中に金貨が何枚あるか当ててみよ。当てたものが一番だ」

マリアンヌがすぐに反応して、「二枚」と言った。マリアネットとロゼットが顔を見合わせながら「三枚」と言い、マリーは「じゃあ一枚」と言った。侯爵がゆつくりと右手の親指から握りを開くと金貨は二枚だった。

「お前の名前はなんという？」

「マリアンヌよ！」

「それではマリアンヌ、お前だけ残れ。それ以外の娘は部屋から出て行くのだ。ラトゥール、お前はここにいろ！」

「畏まりました」

侯爵は早々に三人を部屋から追い出すと、ドアを閉めて門をかけた。ドアの閉まる重い音がして、門の金属が触れる硬い音がした。

「マリアンヌ、お前の歳は幾つだ?」

「十八歳」

ラトゥールは四人のなかでもマリアンヌが一番言葉遣いを知らないと思つたが、よく見ると顔立ちといい、振る舞いといい、まだ子供の面影をあちらこちらに残していると感じられる。しかし胸元を大きく開いた薔薇色のドレスから垣間見える豊かな乳房からは、すでに成熟した女の肉体を見せつけている。

「二人とも裸になってベッドの上に寝るのだ」

突然の指示にラトゥールは戸惑いながらも、青と黄色の横縞の水夫が着るシャツを床に投げ捨て、黒いズボンもその上に放り投げた。一物はまだその気にならず、長く下に垂れていた。マリアンヌもドレスを部屋の隅に置かれていた椅子に掛け、言われた通りにベッドに仰向けになった。

「ラトゥールよ、今日はお前が僕の立場だ。お前は僕の『侯爵殿』になる。僕はお前の従僕になる。どうだ、僕のことを『ラフルール』を呼んでみる! 侯爵殿」

「ラフルール!」

疑問文とも、感嘆文ともわからない口調で、小さな声でラトゥールは発音した。

「侯爵殿!」

侯爵はラトゥールの一物を左手で擦り始めた。

「さあ言ってみろ! 僕のことをラフルールと言ってみろ!」

「ああ、ラフルール……、ラフルール、ラフルール!」

ラトゥールの声はしだいに大きくなり、それとともに一物もそそり立ってきた。ベッドの奥で寝ていたマリアンヌはこの光景を不思議な眼差しで見えていたが、侯爵に俯せになれと言われて従うと、侯爵は燕尾服のポケットから鞭を

取り出し、いきなりマリアンヌの尻を打ち始めた。マリアンヌは悲鳴を上げたが、その悲鳴が大きくなればなるほど、侯爵の鞭にも力が加わり、ラトゥールの躰にまで鞭の痛みが跳んできた。侯爵はラトゥールの一物を手放すと、「侯爵殿」と言いながら、二人を鞭打った。ラトゥールの一物は打たれれば打たれるほど、ますます硬くなり躰の上でピンピンと揺れた。

「マリアンヌ、気持ちがいいか？　しかし僕にはお前の快楽など関係ない。重要なのは己の快楽だ」

侯爵はときどき左手でラトゥールの一物に触れながら「侯爵殿！」と叫び、ラトゥールは「ラフルール！」と応じた。マリアンヌの白かった尻は赤く色づき、悲鳴のなかに呻きが混じった。その声を聴きながら、侯爵は半ズボンから自分の一物を取り出し、左手で擦り出した。右手で鞭を打つと、その一物はしだいにそそり立ち、赤い亀頭が上を向いていた。

「ラトゥール、お前はしばらく部屋を出て行くのだ。この娘と二人きりにしてくれ」

侯爵は鞭を床に投げてそう言うと、大きな一物を半ズボンのなかに仕舞った。ラトゥールはベッドから起き上がる。自分の衣類を纏めて部屋から出て行った。彼の「へ」の字になった一物は、細い躰に取って付けたかのように異様なほど長く見えた。

「マリアンヌ、お前にいいものをやろう。アニスのボンボンだ。食べてしろ！」

侯爵はヴェストから金の縁飾りのついた水晶のボンボン容れを取り出すとマリアンヌに勧めた。

「これは腹に作用して屁を出すボンボンだ。きっとアニスのいい香りがするに違いない。僕はお前の屁の匂いを嗅いでみたいのだ！」

マリアンヌは恐る恐るボンボン容れに指を入れてひとつ摘み、口に入れる前に匂いを嗅いだ。アニスの香りとともに、不思議な刺激臭がしたが、口の中に放り込んだ。甘くて苦い味が口の中に広がった。

「屁を出すためにたくさん食え」

マリアンヌは言われるがままに二粒頬張り、それを呑み込むと、そのあと三つ口に入れた。舌を刺すような刺激があつたが、それも呑み込んだ。

「もつともつと食えー」

更に一粒口に入れたが、「もうこれ以上は無理です」と侯爵に伝えた。侯爵は少し不満な表情をしたが、諦めると「屁は出ないか？」と尋ねた。マリアンヌはそんなに急に出るものなのかと不審に思ったが、「まだ出ない」とだけ答えた。侯爵はマリアンヌに尻を持ち上げるように命じると、彼女の両脚を開いて肛門を嗅いだ。

「出ないようだな。しかしお前はなかなかいい肛門をしている」

侯爵は、肛門に当てていた鼻を抜くと、今度はそこに右手の中指を突っ込んだ。マリアンヌは小さな呻きを漏らしたが、抵抗することもなく、侯爵の指に任せた。

「儂はお前の柔らかな肛門が気に入った。ぜひこの肛門で遊びたい。ラトゥールと三人、肛門で交わることにしよう。その前に鞭で儂の躰を打ってもらいたい」

侯爵は燕尾服の先程とは反対側のポケットから鞭を取り出すと、その鞭をマリアンヌに手渡そうとした。マリアンヌはその鞭を見て一瞬驚愕し、手を引つ込めた。というのも、侯爵が渡そうとした鞭の先には鉤針がついていたからである。

「構わぬ、それで打つのだ！」

マリアンヌは恐る恐るその鞭を受け取ると、両手で握り締めた。羊皮で作られた鞭の先端だけがずっしりと重い。侯爵は服を脱ぎ捨て、上半身を裸になると、彼女に背を向けるように言った。

「さあ打て！ 遠慮はいらぬ！」

マリアンヌはベッドから立ち上がり、鞭の握りを右手に持ち替えると、侯爵の背中を力なく打った。

「遠慮はいらぬと言っているだろ！ 力いっぱい打て！」

マリアンヌは力を振り絞って、もう一度打った。鉤針のいくつかが背中に食い込み、血が流れ出した。

「もっと打て！」

もう一度打とうとしたが、途中で力が抜けてしまい、鉤針は弱々しく侯爵の背中を打った。

「あたしにはできません。許してください！ 許してください！」

マリアンヌは床にへたり込むと、侯爵の顔を見ずに言った。

「続けよ！ 続けよ、マリアンヌ！」

「もうできません、お許しください、お願いですから！」

「そうか、仕方がない。それでは草帚を持ってこい。それを替わりにする」

マリアンヌは「お待ちください、ムスユー」と敬語を使うと、逃げるように部屋から出て行った。

台所で雑談している輪のなかにマリアンヌが飛び込むと、みなは何が起こったのかわからず稲妻のような緊張が走った。

「どうしたの、マリアンヌ？」

マリィが間髪を入れずに尋ねた。

「草帚、草帚ある？」

「買に行かないとないけれど、どうしたのよ？」

マリアンヌは事の次第を早口で喋ると、マリィは「大丈夫、すぐに買に行かせるから」と言って、女中のジャンヌ・フランソワーズに急いで買に行くように命じた。マリアンヌは鉤針の鞭にかなりショックを受けた様子で、も

うあの部屋には戻りたくないと言った。

「心配することはない、マリアンヌ！ 鞭打ちは侯爵の趣味だ。侯爵を打って稼げばいいんだ」
 ラトゥールが彼女を慰めようとしたが、娼婦としての経験が浅いマリアンヌはすっかり子供の顔に戻っていた。

「鞭打ちが好きな客はいくらでもいるさ、あなたはまだ若いから知らないだけなんだよ」

マリリーが諭すように言った。

「でもあんな恐ろしい鞭は見たことがない……」

「あなたが打たれるんじゃないからいいじゃないか！」

マリリーとマリアンヌのやり取りをリアネットとロゼットは興味津々に聴いていた。そこにジャンヌ・フランソワーズが草帯を買って戻ったが、マリアンヌはやはり部屋に戻りたくないと言いつ張った。

「あなたが行かないとみんな困るんだよ。侯爵は金をもっているんだから、さあ行きなよ！」

マリリーの声に押されて、マリアンヌは草帯を持って部屋に戻った。床に棄てられている鉤針付きの鞭を見て一瞬躄が強張ったが、マリアンヌは草帯を侯爵に渡そうとした。

「今度はそれで儂を打つのだ！」

マリアンヌの心持ちは些か和らいだが、背中を伝う血の細い線を見ると心は折れそうだった。背中を避けて、マリアンヌは侯爵の尻を打った。

「もっと強く、強く打つんだ！」

言われるがままに力を込めて、マリアンヌは何度も打った。長いブロンドの髪が左右に振れ、それが視界を妨げると、左手で髪を後ろに投げ飛ばして草帯を打った。「強く、強く打て！」と侯爵はしだいに興奮しながら声を荒らげた。その度にマリアンヌは右手を握り直して、小指に力を入れた。何度打ったのか思い出せなくなったときに、マリ

アンヌは胃に痛みを感じ始めた。チクチクと刺すような痛みが胃に走り、その痛みは時間とともに大きく激しくなった。

「侯爵さま、胃が痛い、痛くてもうこれ以上は……」

「打つんだ、マリアンヌ！ それは薬が効いてきた証拠だ！」

「もう無理です！」

マリアンヌは扉に向かって駆け出し、部屋を出ると台所に向かった。

ラトゥールの生い立ちについての話を聞いていたみなは、全裸で胃を押さえながら台所に飛び込んできたマリアンヌを見て、今度はまた何事が起こったのかと驚いて、声も出さずに彼女の姿をただ見つめるばかりだった。「誰か水をちょうだい！」と絞り出すような声でマリアンヌが言ったので、ジャンヌ・フランソワーズがグラスに水を注いで持ってきた。マリアンヌはそれを奪い取るようにして飲むと、「ちょっとこのままにしておいてほしい」と言って、テーブルに顔をつけて目を閉じてしまった。

「ラトゥール！ 何をしている、女を連れて来い！」

侯爵が開いた扉の奥から大声で怒鳴った。ラトゥールと目があつたマリイが「自分が行くわ」と小さな声で言うのと立ち上がった。

7

ラトゥールがマリイを伴って部屋に入っていくと、侯爵はマリイの顔を見て幾分気持ちが落ち着いたようだった。ラトゥールが門を締めている間に、マリイはマリアンヌがまだ子供であると言いつをした。マリイは二十三歳だが、

娼婦として十五歳から働いているので、客あしらいは上手い。鞭を使った遊びを好む客にも、相手の心の動きを読み取り、配慮しながら対応ができる。

「マリエット、お前は僕の趣味をよく知っているだろう！ 裸になって、ベッドの脚元で猫のように屈むのだ！」

マリーは腰に巻いていた紐を解いて、黒いドレスを脱ぐと床に置いた。

「お前を成敗してやる、思い知るがよい！」

侯爵は草帯を右手に取ると、マリーの尻と背中を交互に打った。

「マリエット、鞭打ちは人間にとって必要な行為なのだ。鞭打ちこそが秩序の安定には不可欠だ。ほら、痛いかわかる？ その痛みが、秩序を作るのだ！」

マリーは返事ともとれる意味の分からない呻き声を発したが、姿勢を変えることはなかった。ラトゥールは壁に凭れながら、この光景を見つめていた。

「マリエット、今度はお前の晩だ。僕を思い切り打つのだ！」

赤く染まった尻と背中を持ち上げて、立ち上がると黙って草帯を左手に握った。マリーの背中から細い血の線が尻にまで流れた。

「お前の好きなだけ打てばよい。遠慮はいらぬ」

マリーは、最初あまり気の進まない様子で、力なく打ったが、侯爵が「もっと強く！ もっと強くだ！」と言うので、しだいに指に力を入れて本気で打った。侯爵はマリーの手を遮ると、マントルピースに近づきナイフで傷をつけた。そしてマリーの方を振り返ると、まるで芝居を演じるように両手を広げて語り出した。

「マリエット、鞭打ちは男の特権ではない。女が残虐であるという例は、歴史がいくらでも提供してくれるではないか。ユステイニアス帝の皇后テオドラは、去勢をする場面を見るのが好きだった。メッサリナが手淫をすると

きには、自分の目の前で男たちにも自慰をやらせて、彼らをへとへとにしたものだ。アングラ女王のザンガは、恋人たちに身を任せた後すぐに彼らを殺してしまったではないか。彼女はしばしば自分の目の前で、兵士たちを闘わせ、勝った者には自分の躰を褒美として与えたのだ。中国の皇后ゾエは、目の前で罪人を処刑するのを見るのが、何よりの楽しみだった。罪人がいないときは、奴隷を犠牲にし、その間に彼女は夫と戯れ、犠牲者が苦しみに耐える残虐行為を見ながら、絶頂に達したのだ。フロリダの女たちは、夫の好物を大きくさせ、その亀頭の上に小さな虫をのせて、彼らに激しい苦痛を味わさせた。この拷問のために、彼女たちは夫を縛りつけ、できるだけうまく拷問が成功するようにひとりの男のまわりに多くのものが集まった。スペイン人がやってくると、彼女たちは、この野蛮なスペイン人が自分たちの夫を殺す間、自ら夫の躰を支えていたのだ！」

侯爵の身振りはますます芝居がかり、その声も大きくなった。

「女たちがこうした残虐な衝動を感じるのには、自然が望むからであって、お前たち女を責めるのは間違っている。残虐な男たちが自分たちの凶暴性を癒すために用いる、効果抜群の鞭打ちという方法を、女たちも用いる習慣をつければよいのだ。もちろんすでに幾人かの女たちがこの方法を用いているが、儂が望むほどには女たちの間で広まってはいない。女の残忍さにこのような捌け口を与えてやれば、社会にも利益になる。こうした方法がないからこそ、女たちは別の方法で、その残忍さを満たそうとするのだ。それゆえ、社会に毒液をまき散らしながら、夫や家族を悲しませることになるのだ。鞭打ちが女にとつても必要な理由がよくわかったであろう！」

侯爵は元の位置に戻ると、両手を握り締めて「さあ、打て、マリエット！」と叫んだ。マリーは打つたびに小さな声を出した。その声がだんだんと大きくなったが、声を出さないと力が入らないからだ。マリーが疲れ果てて打つのを止めたとき、侯爵の好物は大きく上を向いていた。

「マリエット、こちらに來い！ ベッドの上に仰向けに寝るのだ」

息を切らせながら、マリイは草帯を床に投げると侯爵の指示に従った。侯爵はマリイの両脚を抱え込んで一物を入ると、ラトゥールに「こちらに來い」と命じて、垂れ下がっているラトゥールの一物を左の手を使って擦り始めた。手の動きと合わせるようにして腰を動かしながら、侯爵は再び大声で語り始めた。

「お前たちは心の内にある残逆性を知らないのだ。よく聴け！ マリエット、お前の奥底に快樂が疼き出したであろう。お前は自分の快樂しか考えられぬ。それが真実なのだ。ラトゥール、もう少して快樂が訪れるぞ。快樂の行為においては、自分がすべてであり、他者は無であることがよくわかるであろう。マリエット、儂の快樂はお前とは無縁のものだ。いやむしろ、儂の甘美な感覺はお前の苦痛から生じるのだ。だとするならば、どうして他者の苦痛を避けなければならぬのだ」

マリイは疼き出した仄かな快樂のなかで、侯爵の言葉を聞くでもなく聞いていた。

「自然の声のなかで、われわれがはつきりと耳にするのは、他者を犠牲にして、自ら楽しむようにという変わるこのない、聖なる忠告なのだ。残虐性というものは、悪徳とはまったく違い、自然がわれわれの心のなかに刻み込んだ最初の感情だ。自然の法則は人間におけるよりも動物において、はるかにはつきりと読み取れる。文明化された人間よりもはるかに自然に近い野蛮人の方に、残虐性は認められる。残虐性ははまだ文明によって歪められていない人間のエネルギーであり、自然はわれわれに等しくこの美德を与えたのだ。残虐性が危険なのは、文明状態においてだ。被害者はたいていの場合被害を斥ける力も手段もたないからだ。非文明状態では、残虐性が強者に対して加えられるならば、それは強者によって斥けられるであろうし、また弱者に加えられるならば、それは自然の法則によって強者に屈伏する弱者だけを傷つけるにすぎず、残虐性は何ら問題とはならないのだ。わかったか！

さあラトゥール、元気になったぞ。それを儂の尻に入れるのだ。お前の大きな一物を奥まで入れてくれ！」

侯爵の肛門にラトゥールは挿入すると、侯爵の動きに合わせて腰を動かした。三人の息遣いが激しくなり、侯爵の

大きな唸り声とともにみんなが果ててしまった。

8

マリーが部屋を出てしばらくすると、今度はロゼットが入ってきた。大柄なロゼットが床を歩くと軋んだ音が響いた。髪は短く纏められていて、小さな顔は美少女の面影を残している。

「名前はなんと言った？」

侯爵が尋ねると、「ロゼット」とだけ答えた。

「ロゼット、裸になって、ラトゥールと並んで寝るのだ！」

ロゼットが草色のドレスの肩紐を外すと、引き締まった尻と長い美しい脚が露になった。カーテンの隙間から銅を焼いたような陽が入り込み、ロゼットの脚にまで届いている。ロゼットが両手で胸を押さえながらベッドに横になると、侯爵はラトゥールに目で合図を送り、ラトゥールも横になってロゼットを抱き締めた。ラトゥールが彼女の首から胸まで愛撫を繰り返すと、見る見るうちに彼の一物は回復して大きくなった。洋紅色の龟头が彼女の恥丘にコツコツと当たっている。ラトゥールがその龟头を彼女の柔らかい陰毛の奥に挿入したときに、ロゼットは微かな善がり声を漏らした。

「ラトゥール、どちらがいい？ 女の前がいいか、後ろがいいか？ 答えてみよ！」

侯爵はラトゥールの行為を見ながら、つい先程のマリエットとの行為を全否定して、まるで汚らわしい光景を見るかのように熱い声で尋ねた。

「あつしはどちらも好きでございませう、侯爵殿」

まるで美味しい鴨肉料理を横取りされたかのような不意打ちを食らったラトゥールは、現実には引き戻され、小さな声で答えた。

「ラトゥールよ、気にすることは無い、続ければよい！」

ラトゥールはその言葉を信じて、自らの快楽に従順だったが、侯爵はなおも続けた。

「世界中を見渡しても、ソドムの快楽に匹敵する快楽は絶対には無い。これは、哲学者の快楽であり、英雄の快楽だ。シャルル・コレも言っているではないか、『今では女性器好みの馬鹿者しかいない。昔は哲学者も英雄もすべて肛門好きであった』と。儂の本当の趣味はお前もよく知っているであろう、ラトゥール」

「存じております……」

ラトゥールは一瞬動きを止めたが、それは文字通り一瞬だった。

「そもそも『ソドム』という名で呼ばれ、火あぶりの刑となるこの名は、小さな村の名前だったのだ。ソドムやゴモラという町が天の火によって焼き尽くされたのは倒錯行為に対する神の罰だという寓話は、誤りであるどころか、まったくありそうもない。これらの村は古い火山の噴火口に位置していたので、イタリアの諸都市がベズビオ山の溶岩によって呑み込まれたように、火山によって滅んだのに、奇蹟になったというわけだ。

精液の浪費も自然の意図に沿っているのだ。精液は子供を作るためにあるという考えは叩き潰さなければならぬ。精液が人口増殖を目的とするなら、自然は性交を伴わない精液の浪費について許さないとはいえずだが、われわれは夢のなかや思い出のなかで漏らしているのではないか。好きなどきに、好きなどころで、われわれは精液を浪費できるのではないか。おまけに精液が子供を作るためだけだとするなら、自然は貴重な精液を無駄にせず、精液が流れ込むのを許すのは、子供を作るための女の器のなかに限られるはずだ。ましてや自然は、われわれに与えた射精の快楽が、人口増殖以外の目的で、感じられることを望みはしないだろう。なぜなら、われわれが自然を侮辱しているまさにその

瞬間に、自然がわれわれに快樂を与えるなどとはどう考えていられないからだ。

ラトゥールよ、よく聴くがよい。自然が人口増殖を望んでいるならば、どうして精液の浪費を許すのだ！ 男にとっては、有効な使い方をしても、浪費しても同じ快感ではないか！ そんな考えは、良識に対する挑戦だ。同性愛の男や女たちは、自然を冒瀆するどころか、性交を頑に拒絶することで、自然に奉仕しているのだ。人口増殖は決して自然の法則ではなく、せいぜい自然が大目に見ているにすぎないのだ！」

ラトゥールは侯爵の言葉の意味の分からない呪文のように聴いていた。「ラトゥールよ」と言われて、一瞬現実と呼び戻されたが、快樂の別世界を泳いでいた。ロゼットの膺のなかに痙攣しながら精液を流し込むと、ロゼットも脱力状態になった。侯爵は二人の行為を見ながら、軽蔑した表情になり、二人に休む間も与えず、ロゼットには俯せになるように、ラトゥールにはすぐに回復するように命じた。ロゼットは緩慢な動きで命じられた姿勢をとった。ラトゥールは萎びた一物を左手で擦り始めた。

「愚か者たちよ、これは自然の怒りだと思え！」

侯爵は鞭を右手に握るとまずロゼットの尻を打ち始めた。その鞭は空気を切り裂き、ロゼットの尻に炸裂した。ロゼットは打たれるたびに、言葉にならない声を漏らしたが、侯爵は打ち続けた。右手が辛くなると、左手に持ちかえて打った。ロゼットの尻は褐色からしだいに緋色に変化して、紅色の血が滲みだした。

「ラトゥール、何をもたもたしている！ まだ勃起しないのか！ こちらに來い、儂が勃起させてやる！」

ラトゥールは起き上がり、侯爵に一物を預けると、侯爵は下を向いた一物を左手で擦り始めた。それと同時に、ロゼットの尻を打ち続けた。

「幸福で尊敬すべき娼婦、ロゼットよ。お前は男たちの欲望につねに身を任せなければならぬ。世間はお前たちを卑しめているが、快樂に囲まれているお前たちは、とりすましている女よりも社会にとってはずっと必要だ。お前た

ちは社会に尽くしているのに、社会はお前たちから不正にも敬意を取り上げているのだ！ 可愛い娼婦たちは、実のところ社会の救済者だ！ お前たちは哲学者だ！

ロゼットにも侯爵の言葉は理解できないものだった。鞭に耐えること、ただそれだけが彼女の意識の中にあつた。

「女は、たった一人の男のために作られているのではない。自然が女を創つたのは、すべての男のためだ。女は自然のこの聖なる声にだけ耳を傾けて、女を求めるすべての男に相手構わず身を委ねるべきなのだ。常に娼婦になるべきであつて、決して恋人になつてはいけない。恋愛を避け、快楽を讃えなければならぬ。そうすれば、女たちは人生のなかに、薔薇の花しか見出さないのだ！」

鞭打ちを重ねながら、侯爵の左手の指にも力が入り、ラトゥールの一物はしだいに硬くなつていった。

「ラトゥール、ロゼットの肛門に入れろ！」

「ああ侯爵さま、それはお許しください。神が禁じております。どうかお許しください！」

ロゼットの哀願に対して、侯爵はすぐに反応した。

「神がどうしたというのだ、神などこの世にはおらぬ！ 神は詐欺師たちがでつちあげたものだ。ナザレの下劣なペテン師は、何らかの偉大な思想を生み出したか？ 彼の卑劣で胸のむかつく母親である、慎みのないマリアは、何らかの美德をお前の心に吹き込んだか？ お前は、死後の楽園にわんさといふ聖人たちの中に、偉大さ、勇壮さ、それとも美德の何らかの模範を見出すとでも言うのか？ この愚かな宗教は、偉大な思想に何ら寄与しないために、いかなる芸術家も、彼が建てる記念碑のなかにこの宗教の象徴を使うことができないのだ。今日われわれは、ペテン師どもが説いた空虚な神や、馬鹿げた帰依から生ずるあらゆる宗教的空理空論を、ともに軽蔑せねばならぬ。もはやこのような慰み物によつて、自由な人間を騙すことはできないのだ！」

すつかり回復したラトゥールはロゼットの尻を持ち上げ、唾液を垂らすと一物を力いっぱい挿入しようとした。口

ゼットは尻を振って抵抗したが、すでに疲れ果てていてラトゥールに抗うことができなかつた。

「ラトゥール、僕にいつもやってるようにこの女を楽しませてやれ！ ロゼット、お前には一ルイやろう！」

侯爵はこの光景を見ながら、自分の一物を取り出して左手で擦り始めた。

「今では無神論が、考えるということを知っているすべての人々の唯一の学説なのだ。人々が啓蒙されるにつれて、運動は物質にとつて固有のものであるから、この運動を伝えるために必要な動因は現実的根拠のない存在となつたのだ。また、存在するものはすべて本来的に運動するものでなければならぬから、運動を与える支配者は必要なくなつたのだ！」

ラトゥールはしだいに動きを早め、ロゼットを背後から抱きかかえながら射精した。ロゼットは「お許しを！ お許しを！」と掠れるような声を漏らしていたが、死んだように動かなくなつた。侯爵はそれを見届けると、擦っていた手を止め、「侯爵殿！ 侯爵殿！」と叫んだ。ロゼットはしゃくり上げながら、自分のドレスを手に取ると逃げるように部屋から出て行つた。

9

ラトゥールに呼ばれてマリアネットが部屋に入ってきた。青藍せいらんのドレスを纏い清楚な顔をしたマリアネットは、部屋に入る前にすっかり怯えた様子だつた。侯爵に対する心情も、興味から恐怖へと変化しているのが、彼女の落ち着きのない表情からは読み取れた。侯爵はマリアネットの愁いを含んだ表情が気に入つた様子で、「こちらに來い」と言うのと、扉の前でじっとしているマリアネットに自ら近づいた。

「お前はなかなかいい顔をしている、美しい目をしている……」

「マリアネットの瞳はトルコ石のような青緑色で、その目は大きく、伏し目がちであった。侯爵は彼女の顔を両手で包み込むと、自分の胸に引き寄せて抱き締めた。

「マリアネット、恐れることなど何もない。僕の趣味が怖いか？ 鞭打ちが怖いか？ この世のなかに、風変わりな趣味などと呼ばれるものは一つとしてない。あらゆるものが自然の手のうちにあるのだ。自然は、人間を創造したときにその顔を一人ひとり違えて作ったように、その趣味も一人ひとり違えて作ることを好んだ。したがって、自然が人間の顔を多様に作ったのと同じように、われわれの好みを多様に作ったからといって、驚く必要など何もないのだ！」

マリアネットは小柄な軀を侯爵に委ね、抵抗することはしなかった。侯爵はマリアネットの肩紐を外し、彼女を全裸にすると、首筋から愛撫を始めた。乳首が上を向いた形の良いふくらとした乳房には関心を示さず、背中から尻から太腿を、まるで愛する子猫を撫ぜるように愛撫した。

「お前をその気にしてやろう、マリアネット。そのためには前戯が必要だ。尻をこちらに向けるのだ」

侯爵はベッドの上に投げ捨てられていた鞭を取ろうとした。その鞭の方に視線をやったマリアネットは、羊皮でできた鞭先にべつとりと真朱まそほの色をした血が付いているのを見て、驚愕した。

「すぐにいい気持ちにしてやる。お前も二十五回ほど打たられはその気になるし、僕もその気になるだろう。僕もお前も自然の法則に従うだけだ」

侯爵が鞭を手にしたとき、マリアネットは恐怖に駆られて、部屋から逃げ出そうと扉に向かって走り出した。

「待て、マリアネット！」

侯爵が叫ぶと同時に、ラトゥールが扉の前に立ちはだかった。侯爵はマリアネットの左手を掴み、「怖がらなくていいのだよ」と子供を諭すような口調で言った。マリアネットは目に涙を浮かべ、諦念したかのように肩を落とし、

頭を垂れた。真珠の粒のような涙が目からひとつ零れた。

「ラトゥール、マリアンヌを呼んで来い。彼女が食べたボンボンの効果がそろそろ出てくるはずだ」

「畏まりました」

ラトゥールはそう返事をする、マリアネットが逃げないように扉を僅かに開けて、台所にいるマリアンヌを呼びに行った。マリアンヌの胃の痛みも幾分和らいだようで、娼婦三人で自分たちがこれまでに取った客の奇妙な趣味についてひそひそと話し合っていた。マリアンヌはラトゥールと目が合つと、視線を横に逸らせたが、そこには強気な性格が表れていた。

「マリアンヌ、侯爵がお前をお待ちだ。ボンボンの効果を確かめたいそうだ」

マリアンヌはマリーの顔を一瞥したが、「行ってやるわ」と言いながら立ち上がった。マリアンヌが部屋に入ると、侯爵は満足したような笑顔になって、「腹の具合はどうだ」と尋ねた。「胃はまだ痛むけれど、大丈夫！」とマリアンヌは素っ気なく答えた。

「ラトゥール、マリアンヌのためにコーヒーを持ってきてやれ」

ラトゥールが台所で女中に命じると、暫くしてジャンヌ・フランソワズが部屋にコーヒーを運んできた。マリアンヌはそのコーヒーを受け取ると、口元を緩めて女中に「メルシー」と言った。女中が出て行くと、侯爵は門を叩いて、「コーヒーのおかげでお前の胃も落ち着くだろう」と言った。

「マリアンヌ、ボンボンをもう少しどうだ？」

侯爵はボンボン容れの蓋を取って勧めた。

「あたしはもう十分食べたから結構です」

「そんなこと言わずにもう一粒食べてみる！」

「あたしはいらない！」

侯爵はマリアンヌに食べさせることを諦め、今度はマリアネットに勧めた。マリアネットは水晶のボンボン容れに興味を示すと、小さな指を突っ込んで一粒摘まんのだ。

「ひとつと言わずにもっと取るがよい！」

侯爵に促されて、マリアネットは三粒を三本の指で摘まむとゆっくりと口に入れた。マリアネットはそのボンボンを口に入れるや否や、顔を擧めて吐き出した。吐き出されたボンボンは床の上を転がり、そのうちの一つはベッドの下に潜り込んだ。マリアンヌはこの光景を、悍ましいものを見るような目で眺めていた。侯爵は、この光景を見て不愉快になった。とくに軽蔑するような表情を浮かべるマリアンヌに気づくと、いきなりマリアンヌをベッドに押し倒した。

「ボンボンの効果を確かめてやる！ 尻をしたいだろうか？ 尻を出すのだ！」

侯爵はマリアンヌの蔷薇色のドレスを捲り上げると、彼女を腹這いにして、尻の間に鼻を押し込んだ。

「さあ出すのだ、マリアンヌ、アニスの芳香を出すのだ！ お前は僕の快樂に奉仕しなければならぬ。快樂こそが唯一の神なのだ。人がすべてを捧げなければならぬのは、ただ快樂に対してだけだ。快樂こそがもともと神聖なものなのだ、さあ出せ！」

マリアンヌは何とか出そうと尻を動かしたが、尻が出そうな気配はまったくなかった。

「無理です、いくら頑張っても出そうにありません！」

侯爵は鼻を上げると、苛々した様子をして、「それならば、僕がお前に尻を出させてやろう」と言つて、ベッドの上の鞭を手にした。

「立て、マリアンヌ、お前の尻を打つてやるから。マリアネット、僕の側に来るのだ。彼女が打たれているところ

をよく見ておけ。それはお前の快楽でもある！」

マリアンヌは尻を出し、侯爵は力を込めて鞭を打った。先程打たれた尻の血は止まっていたが、紅葉色の尻からは再び血が流れ出した。鞭の空気を割く音が部屋中に響き、侯爵の唸り声にマリアンヌの悲痛な叫び声が混じり合った。侯爵の鞭が尻を外して太腿を打ち、マリアンヌは痛みに堪えられず、「アイー」と大声を出した。侯爵は鞭を投げ捨てるとマントルピースに近づいて、ナイフで鞭打ちの回数を刻み込んだ。それが済むと床に四つん這いになっているマリアンヌの頭の上で威厳ある声で語り出した。

「マリアンヌ、快楽が疼き出したであろう！ お前はその快楽を味わうがよい。しかし儂にはお前の快楽など関係がないのだ！ われわれが身を委ねるべきは、自然がもたらしたこの快楽であり、鞭打ちはその快楽のひとつだ。人は興奮するならもっとも激しい方法でそうしたいと思う。それゆえに、われわれに奉仕する相手が入るうが入るまいが、そんなことは問題ではない。問題は、できるだけ強烈な衝撃で、われわれの神経全体を揺さぶることだけなのだ。自然の声ほどエゴイストなものはない。自然の声のなかで、われわれがよりはっきりと耳にするのは、誰であれ他人を犠牲にして、自ら楽しむようにという変わることはない、聖なる忠告なのだ。

残酷性とは、われわれ誰もが生まれながらもっているエネルギーにほかならない。しかも、このエネルギーを吹き込むのは自然である。したがって、それは一つの美德であって、悪徳ではないのだ。しかし、美德を誇る必要もない、悪徳を悔いる必要もない。われわれを善良に生んだからといって、また極悪に創ったからといって、自然を非難する必要もない。自然は自らの目的、計画、必要にしたがって動いたのであって、われわれはそれに従うしかないのだ」

侯爵は言い終わると、身に着けていたシャツを脱いでラトウールに手渡し、全裸になった。ふつくらとした白い腹の下で、一物が硬くなってほんの少し上を向いていた。柘榴色ざくろになった龟头が誇らしげに顔を覗かせていた。

「マリアンヌ、ベッドに横になれ！」

マリアンヌは肉体の痛みとともに心の内奥が打たれた太鼓のように重く痛み、返事もできず、脱力状態で動くことができなかった。そんな彼女を侯爵は背後から見ていたが、苛々した様子で彼女の両脇を後ろから抱えて、ベッドに仰向けに投げ捨てた。鞭で打たれた尻がベッドに触れ、彼女は痛みから飛び上がって俯せになった。尻を流れていた血がシートに唐紅からくれなゐの水玉模様を描いた。侯爵はベッドに上り、背後からマリアンヌの尻を掴むと一物を肛門に挿入しようとした。マリアンヌは抵抗する力もなく、侯爵の一物を受け入れた。

「マリアンヌ、快楽の涙を流すがいい。お前が味わっている快楽は、シテール島のもっとも甘美な道を通してだ。この道こそ信奉すべき神へと至る道なのだ。この地球上には、ソドムの罪がなかった寺院はどこにもないし、信奉者がいなかったところもない。ギリシア人たちは、ソドムの楽しみを美德と考え、『お尻の美しいビーナス』と名づけた像を建て、ローマでは、アテネで法律を学ばせるために人々を送るとともに、この素晴らしい趣味を持ち帰らせたのだ。歴代のローマ皇帝のもとで、ソドムの趣味はどれほど発展したことか！」

侯爵はしだいに目を潤ませ、その声は熱を帯び、語り口は滑らかになった。手でしっかりとつかんだ尻を持ち上げて、奥深くまで挿入すると、「ああ！」と快楽の吐息を漏らした。

「自然と快楽の子であるこの甘美な趣味は、人がいるところならどこでも存在するのだ。ソドムを罪だと考えるほど、常軌を逸したことはない！これほどの快楽がいったいどうして悪なのだ。悪だというのなら、なぜ自然はこのようなソドムの快楽に敏感な男を創ったのだ！」

侯爵は一物をゆつくりと動かしていたが、しだいにその動きは小刻みになり、尻を持つ指は震えていた。

「侯爵殿、どうか私を背後から襲ってください。侯爵殿！」

侯爵がラトゥールに芝居がかった女声を投げかけると、ラトゥールはベッドに駆け寄って、侯爵の尻に自分の一物

を押し付けた。丸く開いた大きな穴は、いかにも客を待ち受け、哀願しているようであった。

「ラフルール、儂がお前を天国に送ってやろう！あの世の幸福を味わせてやろう！」

ラトゥールも芝居口調になって、侯爵との演技に呼応した。

「侯爵殿、それは間違っております。天国などありません。あの世の幸福などありません。ナザレの下劣なペテン師や慎みのないマリアなど信じてはなりません。死後の楽園にわんさという聖人たちに惑わされてはなりません。彼らは、何らかの偉大さ、勇壮さ、美德を吹き込んだでしょうか？天国もあの世の幸福も、支配者が弱い人間を支配するためにでつち上げた幻想です。騙されてはなりません！」

ラトゥールは一瞬言葉に窮したが、即興で演技ができないことをこれまでに何度も叱りつけられていたので、咄嗟に反応した。

「ラフルール、天国もあの世の幸福も存在しないというその訳を申してみよ！」

「天国もあの世の幸福も宗教が捏造した拵こしらえ事です。ああ！先ずは入れてください、犯してください！」

ラトゥールは自分の一物を侯爵の穴に僅かに挿入すると、動きを止めて、「では宗教とは何だ、申してみよ！」と言つて焦らせた。

「宗教は恐れによって創られました。ああ、早く、お願いです！」

侯爵の限界を知り尽くしているラトゥールは更に奥深くまで挿し入れ、「これでどうだ？」と再び動きを止めて尋ねた。侯爵は「もっと奥まで、根元まで！」と言いながら、腰を前後に動かし、「侯爵殿！侯爵殿！侯爵殿！」としだいに掠れ声になりながら叫んだ。死んだように動かなかつたマリアンヌが「うう！」と呻きを漏らした。侯爵の動きに合わせてラトゥールも腰を動かし、二人は欲望の昂まりとともに獣のように吠えた。

この光景を見つめていたマリヤネットは恐ろしさのあまり目を背け、窓に近づくと、黒い天鵞絨のカーテンを抱き

締めながら目を閉じて、凍りついていた。一条の金色の光がカーテンの隙間から入り込み、獣たちの背中で揺れた。侯爵が重い大声で吠えると、ラトゥールもそれに応じて軽い唸り声を上げ、獣たちは果ててしまった。

部屋の中に静寂が戻り、その静寂はしばらく続いた。暗闇の殻を割るように、マリアンヌが脱力の微睡から現実に取り戻され、「うー！うー！」と小さな声で泣き始めた。侯爵も快樂の祭りである非日常から日常に連れ戻されて、不機嫌そうな声になって語り出した。

「ラトゥールよ、宗教がどのようにしてきたのか教えてやろう。宗教は恐怖心を利用して創られたのだ。嵐や雹が、地球に広く住み着いた最初の人間の食べ物となる果物や穀物を襲ったと考えてみよ。こうした天災を避けるために無力であった人間は、より強いと認めるものに対して、また自分たちを苦しめるために創られたと信じるものに対しては、祈りに頼らざるをえなかったのだ。さまざまな時代に、さまざまな地域で生まれた野心的な政治屋どもは、人々の信頼を利用し、奇妙で空想的で暴君的な神々を予告し、彼らが長や立法者になれるさまざまな団体を作ろうとした。こうした団体を維持するためには、そのメンバーの一人ひとりが、自分の情念や個人的な楽しみを、他者の幸福のために犠牲にしなければならぬと彼らは吹聴したのだ。そこで必要になったのは、求められる償いや犠牲となることを恐れる苦しみに取って代るものだった。それゆえに、こうした政治屋どもが宗教なるものを案出したのだ。あらゆる政治が償いを約束し、苦しみを予告する。この苦しみによって、多くの人々は、他人の財産や妻や娘を自分のものになりたい、あるいは復讐や中傷や自分の評判に輝きを増すために隣人を傷つけようとする自然の性向に、抵抗するように促される。名誉が後に宗教と結びつく。この神なる存在は、宗教と同じように空想の産物であり、さまざまな社会の幸福にも個人の幸福にも役立つ。多くの他者を同じ道徳的規範によって同じ境界の中に取り込むために想像、いや妄想されたものでしかないのだ。わかったか、ラトゥール！」

「よくわかりました、侯爵殿」

ラトゥールは決して理解できとは思わなかったが、この場を切り抜ける返答を反射的に選んでいた。

「マリヤネット、何をしている、こちらに来てラトゥールを刺激してやれ！」

侯爵は相変わらずカーテンの陰に身を隠して震えているマリヤネットに命じた。

「さあ、ラトゥールを元気づけてやるのだ！こちらに來い！」

「私にはできません、私にはできません！」

マリヤネットは同じ言葉を繰り返すと、猫が隙を見て走るように、再び扉に向かって走り出した。しかし、扉の門は彼女の力で開けるには重かった。何度も開けようと試みたが、びくともしなかった。彼女は諦めて床に座り込んでしまった。マリヤネットはベッドの上でひたすら泣き続けた。

「お前たちは娼婦ではないか！快樂に奉仕するのがお前たちの役割ではないか！」

侯爵はどすの利いた太い声で怒鳴った。

「快樂がお前たちの存在の唯一の神なのだ！若い娘がすべてを捧げなければならぬのは、ただ快樂に対してだけだ！お前たちにとって、快樂がもつとも神聖なものでなければならぬのだ！」

言葉だけが部屋に空しく響いた。言葉が理解されるためにあるのではなく、ただ言葉としてぽつんと響いていた。マリヤネットもマリヤネットも、とにかくこの時間から、この空間から逃れたいだけ思っていた。ラトゥールも気まずい、張り詰めた、沈黙の暗闇から抜け出したいと思つたが、何ひとつできなかった。

「わかった、もうよい、お前たちは部屋から出て行ってもよい、ラトゥール、扉を開けてやれ！」

マリヤネットは逃げるようにして、マリヤネットはラトゥールに抱き起されるようにしてゆっくりと部屋から出て行った。

「ラトゥール、引き上げることにする」

侯爵はやや不満気にそう言うと、服を順番に身に着け、鞭をポケットにしまい、みながいる台所に向かった。ラトゥールも大慌てで服を着て、侯爵の後に続いた。

マリアンヌは椅子に腰を下ろして泣き続け、マリヤネットはテーブルに頭を付けて動かなかった。そんな二人をマリとロゼットが見つめていた。女中は出かけたのか部屋にはいなかった。

「報酬だ、取っておくがよい」

侯爵は六リーブル銀貨を四枚テーブルの上に置くと、威厳のある口調で、しかしながら先程とは違う声音で見下ろすように言った。

「今晚もう一度儂に付き合え！一緒に海に行つて遊ぼうではないか。儂に付き合う者には、もつとたくさんの銀貨をやろう！わかつたな！」

誰もが侯爵の顔を見ずに、身動きせずに聞いていた。マリアンヌのすすり泣く声だけが部屋の空気を動かさせていた。

10

港町の午後は暑かった。もつとも暑い午後二時から四時までの間は、街角から人影は消える。暑さを避けるため、マルセイユの人々は建物の奥深くに潜り込み、シエスタをとる。侯爵とラトゥールも宿に戻つて魚の煮込み料理を食べると、それぞれが眠りに落ちた。侯爵は深く、心地よい眠りに落ちたけれど、ラトゥールの眠りは浅く、ほろ苦いものでしかなかった。

午後六時になつて往来に人が戻り始めた頃に、ラトゥールは宿を出てオーバーニュ通りを目指した。侯爵に、今宵

遊ぶ娘を何としても見つけるように指示されていたからである。明朝にはマルセイユを後にして、ラ・コストに戻らなければならぬ。今宵しかマルセイユで遊ぶ時間はなかったのだ、ラトゥールにも焦りがあった。ひよつとすると誰かが付いてくるかもしれないという淡い期待を抱きながらニコラ楼を覗いてみた。マリアネットがいたが、ラトゥールの顔を見ると奥に逃げ込んでしまった。ロゼットを見つけ、「海へ遊びに行こう」と声を掛けたが、「行くはずないでしょ」とけんもほろろに断られた。他の女たちからも胡散臭い眼差しを読み取ったラトゥールは、ニコラ楼では誰も来そうにないことを躰全体で感じ取った。さすがにマリイの部屋に戻る気持ちにはなれず、ジャンヌに頼ろうとした。しかし、ジャンヌの昨日の態度から、望みが薄いこともほぼ確実だった。他に知り合いもない土地では、無駄であるとわかつている行為も、微かな希望の炎によって誘惑され、惑わされるのである。

ジャンヌの部屋を訪れたラトゥールは扉を何度も叩いたが応答はなかった。扉に耳を当てて中の様子を探ろうとしたが、物音ひとつ聞こえず、どうやら不在のようだった。そのときに初めて、ラトゥールは自分が無駄な行動をしていることを悟った。ジャンヌは仮に部屋にいたとしても、絶対に誘いには乗らないことを確信した。

ラトゥールは諦めるとともに途方に暮れた。サン・フェレオル・ヴィユー通りからオーバー・ニユ通りに戻っても、まだ陽が高いこの時間では娼婦は表に立っていないかった。仕方なく出直すことに決めた。

パンとスープで腹ごしらえをしたラトゥールは、九時少し前に宿を出て、再びオーバー・ニユ通りにやって来た。辺りは夕闇が迫り、娼婦たちが通りのあちらこちらで立っている。ラトゥールは何人かの娘に声をかけたが、みんなに冷たく断られた。視線を合わそうとしない娘や、顔を見ると建物に逃げ込む娘もいた。侯爵の昼間の振る舞いがすでに娼婦たちに伝わっているのかもしれない、俺のこのシャツが目印にされているのかもしれない、そんな考えがラトゥールの心のなかに広がり始めた。

オーバー・ニユ通りからサン・フェレオル・ヴィユー通りに入ったところで、ひとりの娘が目を見送らずにラ

トウールを見ていた。ラトゥールが近づくと、娘は口元を緩めて「ボンソワール」と言った。

「ボンソワール、ちよつと話があるから入つてもいいかい？」

「遊んでいく話ならいいわよ」

彼女は人差し指で手招きして、ラトゥールを錠前屋の看板が出ている建物の三階に迎えた。

ベッドと僅かな家具しかない部屋で、ラトゥールは今夜侯爵を連れてくるから、相手をしてほしいと笑顔を振りまきながら依頼した。「金を弾んでくれるなら」と彼女は条件を出したが、「お望み以上貰えるぜ！」とラトゥールは彼女の心を読み取つて答えた。そしてポケットから白いハンカチを取り出すと、「これが約束の印だ」と言つて彼女に手渡した。

「俺はすぐに宿に帰つて侯爵を連れてくるから準備をしておいてくれ」

ラトゥールは真顔になつて、「頼んだぞ！」と強い口調で念を押した。彼女を失うとまったく当てがなくなり、途方に暮れることが目に見えていたからだ。

「わかつたわ、待っているから。直接部屋に来てちょうだい！」

ラトゥールは大急ぎで部屋から出て行こうとしたが、一瞬立ち止まつて彼女の名前を尋ねた。

「マルグリットよ！」

ラトゥールは自分の名前を告げることもせず、通りに出ると、「十三番区館」を目指して駆けた。浜風が左から吹き付け心地よかつた。それは、なんとか娘を見つけることができた安堵から来る心地よさであつたかもしれない。

宿に戻ると、侯爵は王室俳優のデ・ロジエールと夕食を共にしていた。つい先程までは仕立屋が来て燕尾服の採寸をしていたが、デ・ロジエールの訪問はラトゥールには知らされていなかった。まだ食事の途中であつたので、ラトゥールはマルグリットの件をすぐに伝えるべきかどうか迷つた。二人は芝居について談笑しながら子羊の煮込み料

理を食べていたが、侯爵はラトゥールの姿を見つけると、話があるならこちらに来て話せという合図を送った。ラトゥールが侯爵の耳元で、「娘をひとり見つけましたがいかがいたしましょうか？」と告げると、侯爵は給仕を呼んで皿を片付けてすぐにデザートを持つてくるように命じた。

「デ・ロジエールさん、急用ができたので、今夜はこれくらいにしたいと思います。何しろ明日の朝にはラ・コストに出発しなければなりませんので。僕の芝居を上演する件についてはまたお話しすることにいたしましょう」

「いやいや突然押し掛けたのは私の方ですので、お忙しいところ時間をとっていただきありがとうございます」
デザートが運ばれてきたが、侯爵はそれには口をつけず、早々にデ・ロジエールを追い返してしまつた。

11

ラトゥールの後を侯爵はやや早足で歩いた。夜の帳がすでに街をすつぱりと包み込んでいたが、建物からは蠟燭の明かりが漏れ、人々の話し声があちらこちらから聞こえていた。宿からマルグリットの部屋まではそれほど遠くはない。五分も歩けば到着する。

「ラトゥール、そんなに急ぐな！僕は食事の後でそんなに早くは歩けぬ」

ラトゥールは立ち止まって振り向いたが、早く侯爵をマルグリットに引き渡したい思いでいっぱいだった。マルセイユに来てから、侯爵の途轍もない欲望にときどき嫌悪感を抱くことがある。身分の違いは弁えているが、マリアンヌの苦しそうな顔を思い浮かべると、侯爵がよく口にする「もつとも重要なことは、欲望するものが満足することである」という言葉を素直に受け入れることができない。「俺の欲望はどうなるのか？ マリアンヌの欲望はどうなるのか？ 強いものが勝つ、金のあるものが勝つ、身分の高いものが勝つ、自然は本当にそれを望んでいるのだろうか？

か？」足を纏れさせながら歩く侯爵をじつと見つめながら、ラトゥールは不思議な怒りを覚えた。マルグリットの部屋は目と鼻の先にある。ラトゥールは黙って再び歩き出した。それは、侯爵に対する初めての反抗であるかもしれない。侯爵は一瞬立ち止まったが、再びラトゥールの後を追いかけた。

「侯爵殿、ここが娘の部屋です」

建物の前で侯爵を待っていたラトゥールが、畏まりながらも普段よりも力強い声で言った。

「娘の名はマルグリットと言います、三階の左側の部屋です」

「なぜお前は僕と一緒に来ないのだ？」

「あつしは明日の出立の準備をしておきます。最後の夜ですので、どうかおひとりで存分に楽しんで来て下さい！」

「わかった。しかし、娘に会うところまでは居ろ！」

ラトゥールは「畏まりました」と言うのと、侯爵の先を歩き部屋の扉を叩いた。しばらくすると扉が開き、赤紫のドレスを着たマルグリットが顔を出して、二人を招き入れた。

ラトゥールが「こちらが侯爵殿だ」と紹介すると、マルグリットはうっとりとした表情になり、微笑を浮かべて「ボンソワール、ムスユー」と言った。

「ボンソワール、名はなんと言う？」

「マルグリット！」

マルグリットとラトゥールが声を揃えて答えた。

「ああ、そうだった、マルグリットだったな」

侯爵はマルグリットの顔をじっくりと見つめると、穏やかな表情になり彼女の手を取って部屋の奥に歩き出した。

ラトゥールはその光景を見届けると、扉の隙間から退散して、静かに重い扉を閉めた。通りに出ると、肩の荷が下り、マルセイユという大きな街にひとりであることがなぜか信じ難く、心のなかにあった鉛のような重い塊が消滅して、軽快で晴れやかな気持ちになった。

「ひとりでは知らない街にいる、通りを歩く人々が誰かは知らない、自分は次の通りを右にも行けるし左にも行ける、今という時は自分のものだ、束縛がないとはこうした時間をいうのだろうか、これが自由というものなのか」

ラトゥールは言葉によつて考えていた。その言葉は思考の連鎖を促し、次から次へとさまざまな思いが浮かんで消え、また浮かんで消えた。考えることの自由とはひよつとするとこの瞬間なのかもしれないと思つた。顔見知りばかりが共同で生きる小さな世界、何も考えずに習慣に従つて生きる毎日、自分について考えたこともなかった生活、それはマザンでもラ・コストでも同じだった。命じられるままに行動し、僅かな金を得ることに喜びを感じていた。でも今味わっているこの感覚は、過去の喜びとはまったく違うものだった。

ラトゥールは娼婦街を後にして、浜風に誘われるように港に向かった。港は陽が落ちると人影もまばらで、網で繫留された小さな漁船がゆつたりと揺れている。波の音が音楽のように聞こえ、東の空から昇り始めた月が金色の線を描いてゆらゆらと水面みなもに蠢いていた。港を取り巻く建物からは蜜柑色の明かりが漏れているが、辺りは暗く、静寂に覆われていた。石畳に沿つてゆつくりと歩きながら、ラトゥールは心地よい思考の動きに身を委ねた。

「俺は侯爵に救われた、今こうしてマルセイユにいるのも侯爵のおかげだ、侯爵の従僕になることができて良かったではないか、侯爵にはいろんなことを教えてもらった、俺を変えてくれたのも侯爵だ」

「変えてくれた」という言葉と同時に、ラ・コストで侯爵の命によつて彼の尻を犯した光景が浮かんだ。侯爵がラトゥールのことを「侯爵殿」と呼び、「ラフルール」と呼んでくれと、事の最中に言い出したことが鮮明に思い出されて、ラトゥールは口元を緩めた。すると今度は、血に彩られたシーツの上に這い蹲つたマリアンヌの姿が浮かび、

侯爵が背後から一物を挿入している動きのある映像が現れた。

「俺と侯爵との間には、しかしながら乗り越えがたい高くて厚い壁がある、侯爵は貴族に生まれ俺は百姓に生まれ、その違いは何なのか、神がそれを望んだからなのか、侯爵の言葉を使えば自然がそれを望んだからなのか」

今度はなぜかリアネットの美しい清楚な顔が浮かんだ。するとリアネットはラ・コストにいる侯爵夫人の妹の顔に取って代わった。マルセイユの街に来て、やはり彼女以上に美しい女性はいないとラトゥールは思った。

「俺はなぜこの世に生まれてきたのだろうか、生まれる前は何かをしていたのだろうか、あの世などないと侯爵は言うけれどそれでは俺は死んだらどうなるのだろうか、俺が生きた証は子供の頃に墓地で掘り出したあの白骨だけなのか、あの世がなければ死後の延々と続く時間を俺はどのように過ごすのだろうか、死後の世界とはいったいあるのだろうか」

ラトゥールは港の端まで来ると石畳に腰を下ろし、両足を海に投げ出して、その海を見つめた。黒く青い海が揺れていた。

「死後の世界よりやはり今だ、俺は何をしたいのか、明日ラ・コストに戻ると以前のような暮らしが待っている、俺はあの暮らしに満足できるのだろうか、侯爵に仕えることは決して嫌ではないけれど以前とはどこか違う自分がいる、何が変化したのだろうか、何が俺を変えたのだろうか」

そこまで考えると、頭の中に「批判」という言葉が現れた。批判は侯爵がいつも使っている言葉だ。「お前には批判精神がない」と侯爵はラトゥールによく言っていた。ラトゥールには、侯爵の言わんとするところがわからなかったが、ひよっとすると自分が今抱えている違和感が「批判」というものかもしれない、「批判」を覚えてくれた侯爵に自分の「批判」が向いているのかもしれない。

ラトゥールはそう考えると笑い出してしまった。侯爵の存在が威厳のある高圧的な普段の侯爵ではなく、滑稽味を

帯びた軽々しい人形芝居に出てくるような存在に思えたからである。

「どこに生まれるかで人生は決まってしまう、俺が垣間見た侯爵の生活は食うことばかり考えている百姓の生活となんと違うことか、芝居が生き甲斐だと侯爵は言うけれど百姓には芝居など必要ない、侯爵は何でもできると思っているが俺にはできないことばかりだ、侯爵にとって自分の趣味は絶対的であつても周りは趣味の意味すらわからないではないか、侯爵には自分の時間はたっぷりあるが俺には自分の時間などない、マルセイユでひとりになって初めて自分の時間というものを知つたのだ！」

ラトゥールは近くにあつた石を拾つて右手で投げた。波を砕く音がして、波紋が広がつた。その音は静寂を意識させる柔らかく奥深い自然の音だつた。ラトゥールの脳裏に空気を引き裂く鋭い鞭の音が蘇つた。

12

マルグリットの部屋では、侯爵はしきりに彼女にボンボンを勧めていた。侯爵はステッキと長剣をベッドの近くの壁に立てかけると、ベッドに腰を下ろし、マルグリットは彼の前に椅子を運んでくるとその椅子に掛け、うっとり侯爵の顔を見入つた。

「マルグリット、アニスの味がするボンボンだ、食べてみる！」

侯爵は水晶のボンボン容れを取り出すとマルグリットに勧めた。マルグリットは五、六粒指先で摘まむと口の中に入れた。

「どうだ、美味いだろ？ もつと食べろ！」

「いいえ、もう十分ですわ」

「まあ、そう言わずにたくさん食え！ 僕は娘にボンボンを勧めるのが大好きなのだ。これはなかなか手に入らないボンボンだぞ」

マルグリットは侯爵が勧めるので、断るのも礼を失すると思ひ、さらに五粒、さらに三粒と最後には全部を食べ尽くしてしまった。

「お前はなかなかいい娘だ。僕の趣味を満たしてくれ」

侯爵はマルグリットの赤紫のドレスを剥ぎ取ると、抱き寄せながら両手と唇を使って愛撫した。小麦色の肌が身をくねらせ、マルグリットは目を閉じた。

「腹の調子はどうだ？ 屁がしたくないか？」

「屁？」

マルグリットには侯爵が言わんとするところがわからなかった。

「そのボンボンには駆風剤が入っておる。『カルミチイフ駆風剤』という言葉がわからぬか？ それは腹の中のガスを排出する、つまり屁を出させる薬が入っておるのだ」

マルグリットには一向にその気配がなかったが、侯爵はマルグリットの尻に鼻を近づけ、左手で彼女の腹を抱き締めた。その手で腹を強く締めたり、緩めたりしながら機会を待ったが無駄だった。今度は彼女を抱き寄せてベッドに倒し、尻の穴を舐めながら、舌を入れたり出したりしたが、それもなんの効果も生みださなかった。

「マルグリット、屁は出そうにないか？ 遠慮はいらぬ、僕はお前のアニスの香りがする屁を嗅いでみたいのだ！」
侯爵がじりじりと焦り出すにつれて、彼の一物はしだいに勃起し始めた。

「ベッドの端にうつ伏せになり、尻を大きく開いて、頭をできるだけ低くするのだ」
マルグリットは言われた通りの姿勢を取り、侯爵は一物を挿入しようとした。

「ああ、そこは駄目です。神によって禁じられています」

「何を言うか、マルグリット！ 自然がわれわれにこの趣味を吹き込んだのだから、どうしてそんなことがありえるのだ！ 自然が自分を損なうことを命じるとも言うのか、そんなことはありえないことだ！」

マルグリットが「神によって禁じられている」と言ったことが、侯爵の欲望に火をつけた。侯爵は彼女の肛門に唾を吐きかけると、力任せに挿入しようとした。彼女は腰をくねらせてそれを避けようとしたのでうまく入れることはできなかった。

「マルグリット、神なんか糞くらえと言ってみる！」

「侯爵さま、どうかお許しください！」

「さあ、言え、言うのだ！」

「ああ、言えませんが、お許しを！」

「冒瀆的な言葉こそ、欲望を掻き立てるのだ。神を罵ることは最高の快楽となる。重要なのは、快楽の陶醉のなかで、露骨で淫らな言葉を発することであり、この冒瀆的な言葉が想像力を大いに刺激することなのだ。遠慮をする必要は何もない。こうした言葉を溢れんばかりの卑猥な表現で飾つてやればよい。できるかぎり響感をかうような言葉を発すればよい。響感をかうことは、心地よいことだ。そこにはささやかな自尊心の勝利があり、この自尊心は決して軽蔑されるべきものではないのだ。言え、神なんか糞くらえ！ さあ、言え！ 何を怖れている！」

「できません！ 神の冒瀆など！」

「神の罰など恐れる必要はない。この宇宙にあるのは、たった一つの原動力であり、しかもこの原動力というのは、自然だ。奇蹟、いやむしろ人類の母なる自然の物理的結果と言うべきものは、人によってさまざまに解釈され、いづれ劣らぬ滑稽な形のもとに、崇められてきたのだ。多くのペテン師や陰謀家が、人々の信じやすさにつけ込んで、彼

らの愚かな妄想を広めてきたのだ。これこそが神と呼んでいるものであり、お前が冒瀆するのを恐れている正体なのだ！このように虚妄な美徳は、弱い人間だけを束縛するものであり、平静さと勇氣と哲学を性格のなかにもちあわせている者には、縁のないものだ。さあ、神を冒瀆せよ！」

侯爵は自分の言葉に酔いながら、マルグリットの尻の穴に人差し指を突っ込んで言った。

「こは、お前たちが売り物にしているところより一層敬虔に自然に仕えているのだ。人間の繁殖は、自然の寛容でしかない。自然が自らの全能の権利を奪うような行為を、法則として定めたりするはずがないではないか。繁殖は一連の自然の最初の意図でしかないし、もし人類が完全に滅びてしまうとするとするなら、まったく新たな世界を創ることが自然の最初の意図になり、こうした行為は、自然の誇りと力にとっては、自尊心をより満足させるものになるのだ！」

侯爵はしだいに威圧的な口調になり、マルグリットの尻を両手でしっかりと押さえた。マルグリットはその力に抗することができず、身を任せるしかなかった。侯爵は一物を挿入すると、まるで芝居の山場に差し掛かったかのように大声で語り出した。

「注意深く自然の法則を探ってみよ。自然は、後ろの穴以外の祭壇に敬意を表せとは、決して教えていない。それ以外も許してはいるが、命じているのは後ろの穴だ。自然の意図が尻でやることでないならば、どうして自然はその穴の大きさをわれわれの一物とびったり合わせたのか！この穴は一物のように丸いではないか！丸い一物のために、自然が楕円形の穴を創ったと考えるのは常識はずれだ！自然の意図は尻の穴の形から読み取れる！自然は繁殖を大目に見てきたが、どれほど苦々しく思っていることか！ああ、お前の棘の道を通って、薔薇の花に届いたぞ。押してやるから出してもいいぞ」

侯爵は両手で掴んだマルグリットの尻を激しく揺さぶると、深淵に叫びかけるような暗い唸り声を発して射精し

た。しばらくは二人とも動けず、まるで二つの屍が結合しているかのようであった。

「この世に神などおらぬ！」

侯爵はそう言い捨てると、柘榴色の亀頭を引き抜いた。

「マルグリット、排泄してみよ、出すのだ！」

侯爵は怒鳴ったが、彼女はベッドに身を投げ出して崩壊してしまった。薄暗い部屋の中で、マルグリットの微かな呼吸の音だけが聞こえていた。侯爵は動かなくなったマルグリットを見捨てるかのように立ち上がると、両手を大きく広げて天を仰ぐような仕草をして、吠えるように言った。

「おお、想像力よ！ 快樂の原動力である想像力よ！ お前の力は、われわれの意識が偏見から完全に解放たれて生きるのだ。たったひとつの偏見でさえも、お前を萎ませる。想像力は何物にも妨げられない自由な精神に由来している。そうだ、想像の世界は自由なのだ。想像の世界ではすべてが許されている。どんな罪も想像の世界ではありえない。神がお見通しだと！ 神など糞くらえ！ 誰にも邪魔されない想像力が儂の頭には詰まっているのだ。この想像力をもっとも勝ち誇り、もっとも強い快樂をもつのは、それに対立するあらゆる束縛を断ち切るときなのだ。想像力は、規範の敵であり、無秩序や罪の色合いを帯びているありとあらゆるものの崇拜者なのだ！」

侯爵は膝を折ると、今度は両腕を頭の後ろに組み、絞り出すような口調で語り出した。

「この想像力を自由に彷徨さまよわせよ！ 宗教、良識、人間性、美德といったわれわれの義務すべてが規定しようとするつまらない境界線を、想像力が自由に乗り越えることができれば、想像力の逸脱はどこまでも広がっていくのだ。想像力の逸脱がわれわれをより興奮させる。われわれが興奮したいと思えば思うほど、激しく興奮したいと望めば望むほど、もっとも想像できないことに、われわれの想像力を自由に活動させなければならない。そのとき、われわれの快樂は、頭が作り出す逸脱のために、最上に心地よいものになるのだ！」

侯爵は立ち上がって、マルゲリットの方を振り向いた。蠟燭に照らし出され、海老のようにベッドに蹲うずくまるマルゲリットは、背中で微かに息をしていた。

「お前の内面を神に売り渡ししてはならぬ。お前の内面はお前のものだ。なぜそれがわからないのだ。われわれは神になど支配されておらぬ。われわれは独自であり、われわれの内面はわれわれに属するのだ！」

まるで芝居の終わりのように、現実を取り戻した侯爵は、服を身に着け、剣を差し、ステッキを握り、テーブルに六フランを置いて部屋を出た。外に出ると、建物の上に昇った月が侯爵の脚元を朧氣に照らし出していた。

13

六月二十八日は日曜日だった。侯爵とラトゥールは、夜が明けたばかりの時刻に、三頭立ての馬車に乗り込んでラ・コストに向かった。鳥の泣き声に混じって、サン・ロラン教会の鐘が背後から聞こえてきた。

ラトゥールの心の中は昨夜から霽っていたが、侯爵の前では普段通り明るく振る舞った。侯爵の機嫌を損ねないことが、侯爵に仕えることだとラトゥールは全身で感じ取っている。身分が違うということをラトゥールは頭ではなく、躰で知っていた。ステッキを両手で握り締めながら、うとうとと横で居眠っている侯爵は、われわれとは違う世界の人であり、同じ空間を共にできることが不思議であり、言葉を交わせるだけで自分は幸せ者だと思った。自分の全く知らない世界に侯爵は連れて行ってくれる。それは新鮮であり、驚異であり、興奮させてくれる世界だ。自分の躰を侯爵の欲望に委ねることは何の抵抗もない。侯爵に奉仕することは自分の務めであり、侯爵の満足は自分の喜びでもあるからだ。しかし、とラトゥールは思った。昨夜港で感じた侯爵に対する違和感は何だったのだろうか。マリアンヌの血塗られた尻が脳裏に浮かび、そのときの苦しそうな彼女の表情が蘇った。侯爵はマリアンヌを「もの」

としてしか見ていなかった。侯爵の欲望に奉仕する「もの」である。なぜか急にマリアンヌの表情はマリァネットの美しい表情に取って代わられた。「もの」でもマリァネットには人を惹きつける美しさがある。しかし、とまた思った。では俺は何なんだ！俺も「もの」なのか？侯爵の欲望を満たす道具なのか？

馬車は揺れて尻が痛い、侯爵はよく寝ていた。頭を背凭れに凭せ掛け、天を仰ぐような姿で、夢を見ているようであった。そのとき、侯爵は寝言を言った。小さな声であったがはっきりと「アンヌ」と言った。アンヌとは侯爵夫人の妹の名前である。おそらく彼女の夢を見ているのであろう。その無邪気な寝顔を見ながら、ラトゥールは思わず微笑んでしまった。

マルセイユの街は少しずつ遠ざかっていった。一週間後には、侯爵とラトゥールに「毒殺未遂」と「肛門性交」による逮捕状が出されることになろうとは、露知るはずもなく……

了

おわりに

読者はおそらくその後の経緯に関心をもたれるに違いない。ボンボンを食べたマリアンヌとマルグリットは腹痛を起し、六月三十日マルセイユ地方裁判所検事ドゥ・マンドはマルグリットが「数日来、腹痛に苦しめられ、血の混じった黒い嘔吐物を何度も吐いた」ことを聞き知ると、検事は病人の尋問を要請する。七月一日マリエツト・ボレリが、刑事裁判官と地方裁判所検事の前で、また他の三人の娘と七人の証人が刑事裁判官の前で供述を行う。さらにマリアンヌは、サドとラトゥールの肛門性交を告発して、憤慨した様子を示す⁽¹³⁾。七月四日サドとラトゥールに逮捕令状が発せられ、十一日にはラ・コストの城が家宅捜索を受け、九月三日にはマルセイユの地方裁判所で欠席裁判が行われた。というのも、サドとラトゥールはいち早く家宅捜索の情報を掴み、ラ・コストの城から逃亡し、妻ルネの妹アヌを連れてイタリアに逃げ込んでいたからである。九月十一日にはエックス高等法院で最終判決が二人の不在のなかで下される。その判決は「毒殺未遂と肛門性交の罪」により、二人に死罪を宣告するものであった⁽¹⁴⁾。

その後、十月二日にアンヌだけがラ・コストに戻ったが、しばらくするとアンヌは再びサドとニースで落ち合い、十月二十七日には国境を越えてシャンペリーに到着する。シャンペリーは現在ではフランス領のサヴォワ地方に属するが、当時はサルディニア王国領であった。十一月月上旬にアンヌはラトゥールに連れられてラ・コストに戻り、サドは下僕カルトロンとともにシャンペリーで身を潜めていたが、十二月八日、突如サルディニア王国の警官に身柄を拘束され、逮捕された。警官の隊長は、サルディニア王の証明のある逮捕状をもっていたのである。この逮捕の背後にはルネの母であるモントルイユ夫人の意向が働いていた。

サドはミオラン城塞に幽閉されることになる。監視は厳しかったが、サドはなんとかしてそこから逃げ出すことを



ミオラン城塞のサドが幽閉されていた部屋
(写真：関谷)

考える。そして四月三十日の夜、ルネ夫人の助けを借りてミオラン城塞からの脱獄を敢行する。その結果がどうなったのか、またそこには新たな物語が生まれる余地があるだろう。こうした劇的な場面こそ、文学の側から歴史を描こうとする者には心惹かれる題材となる。この点については、歴史学とのアプローチが大きく異なる。というのも、歴史学が求めるのは読者をハラハラドキドキさせる物語ではなく、「真実」を求める意志にこそあるからだ。

この続きは、「参考文献」にあげたサドの伝記を読んで、自分の物語を作り上げてもらいたい。

注

- (1) 小倉孝誠『歴史をどう語るか 近現代フランス、文学と歴史学の対話』法政大学出版局、二〇二一年。
- (2) 同上書、一一五頁。
- (3) 同上書、一二二頁。
- (4) 同上書、同頁。
- (5) 同上書、一四一頁。
- (6) 三浦信孝編著『作家たちのフランス革命』第七章の拙論「マリーリアントワネット像と歴史小説の魅力ーシャンタル・トマ」『王妃に別れをつけて』を参照のこと。
- (7) リン・ハント『なぜ歴史を学ぶのか』長谷川貴彦訳、岩波書店、二〇一九、一二二頁。
- (8) 同上書、三四頁。
- (9) 同上書、三六頁。
- (10) 小倉、前掲書、一八〇頁。
- (11) 同上書、同頁。強調は小倉。
- (12) ボヴェールが指摘した大風の情報は、『Gazette de France』*Courier du Bas-Rhin*『Journal politique』*Clef du cabinet des princes* など当時の多くの新聞で読むことができる事実である。しかし、こうした情報を「マルセイユ事件」とどのように結び付けるのかは物語作者に委ねられている。
- (13) マリアンヌは「憤慨した様子をささ」なければならなかった。というのも、当時の法では、肛門性交は死罪に値する罪であり、それを行った場合は火刑に処すと規定されていたからである。しかしながら、それはあくまでも自分の身を護るための証言である。レリーもボヴェールも濫澤も看破している。
- (14) 「マルセイユ事件」の裁判がこれほど迅速に進んだ背景に、レリーはサドの義父である裁判所名誉長官モントルイユと大法官モープーの対立の存在を確信している (Gilbert Lely, *Sade, Gallimard, coll. «Idees»*, 1967, p. 98; 邦訳、ジルベール・レリー『サド侯爵』濫澤龍彦訳、ちくま学芸文庫、一九九八年、九八頁)。

参考文献

1. Gilbert Lely, *Vie de Marquis de Sade*, t. I, Gallimard, 1952; 邦訳、澁澤龍彦訳『サド侯爵』ちくま学芸文庫、一九九八年（邦訳は本書の数章をまごめた *Sade*, Gallimard, coll. « Idées », 1967 を訳したもの）。
2. Jean-Jacques Pauvert, *Sade vivant*, t. I, Editions Robert Laffont, 1986; 邦訳、長谷泰訳、河出書房新社、一九九八年。
3. Maurice Lever, *Sade*, Fayard, 1991.
4. 澁澤龍彦『サド侯爵の生涯』中公文庫、一九八三年。